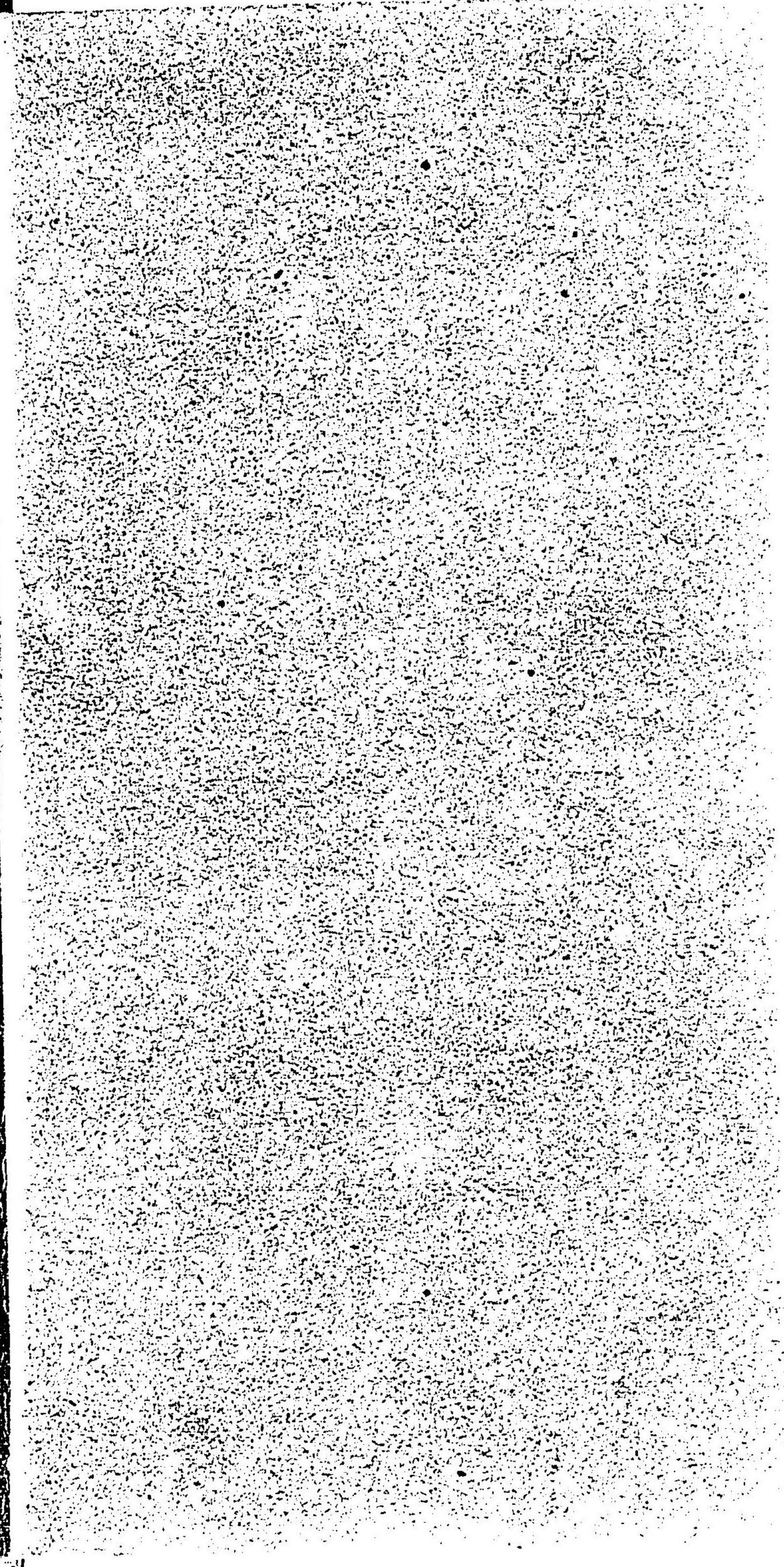


9  
17



新  
新  
新  
新





# ふろふも

金時繪の手函	1
船中の美人と酔漢	5
禁喫煙	8
大白痴紳士	11
家があるくあるく	14
裸林の狂奔	16
新世界の浴とはこんなものか	18
劇場の改築	20
自宅不分明	22
貧婦の一驚	24
馬隠の番人	27
西洋人は寒い事を知らぬと見える	29
昇降器中の一晩	31
瓦斯を吹き消す	34
血染の裾	36
子爵の今羅漢	39
舞踏會より除名さる	41
干法の紙幣て尻を試く	44
この泥だらけを見給へ	46
娼樓の大騒動	48
星亨の迷兒	51
不熟棟の通辭	53

# ふろしむ

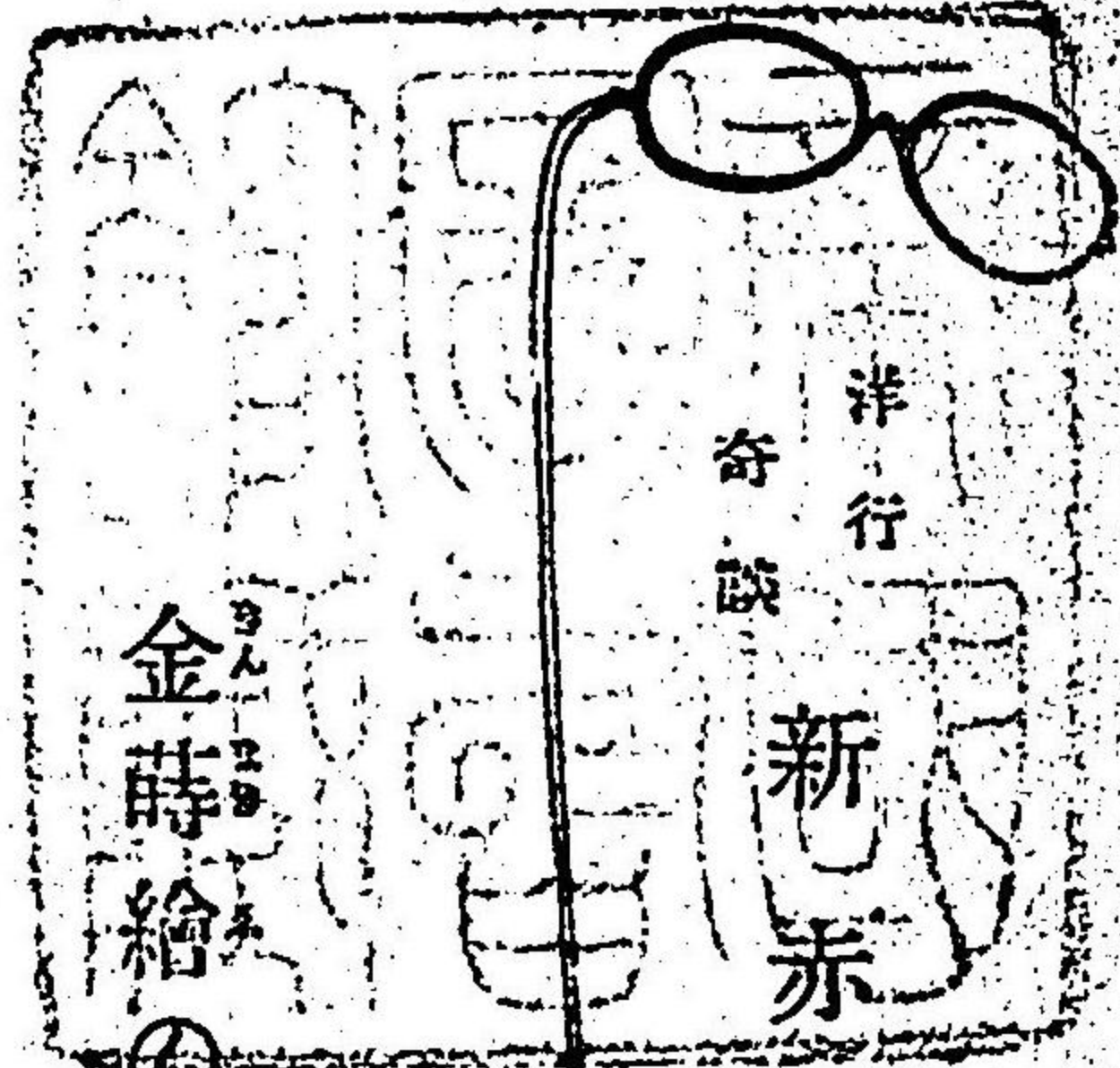
小傾の馳走	101
十九世紀の末路じゃないか	106
愛見桑門に入る	107
祿て顔を拭く	109
蕨野の藝妓買ひ	111
公義號の三鞭酒	113

## 附 録

土耳其風呂	1
印度の蛇使ひ	5
博物學者の失策	11
ありがためいわく	15
停車場のチンチンモガモガ	19
トンネル中の蜜柑	22
汽車の飛乗	24
眉毛を剃り落さる	27

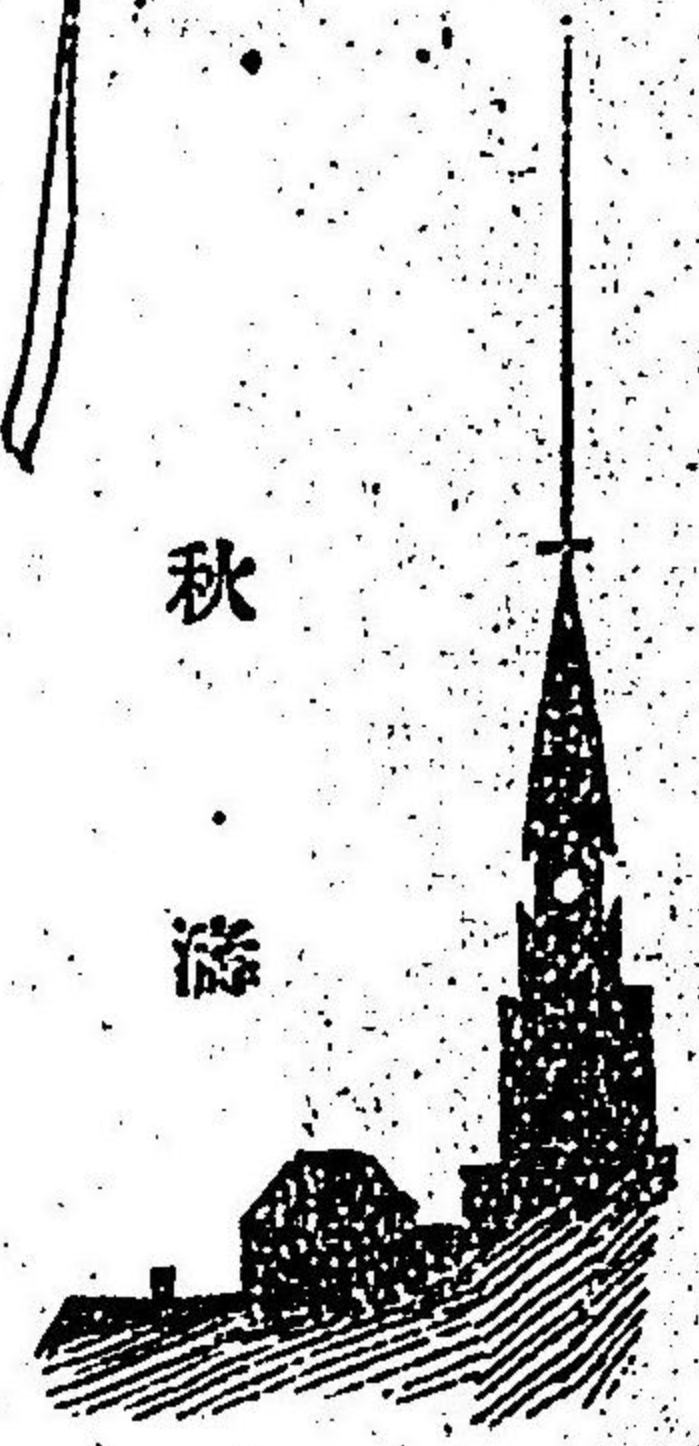
# ふろしむ

洋曲一ツトキ	55
五人前の料理を一人で	58
クワン、エストマー	59
庭器より墜落す	61
〇〇〇俵飯を炊く	62
蕨溜へ頭を投ず	64
牛糞を嘗む	67
晚餐料に百法	68
汽車中の大便	71
佛人は日本語が話せる	72
便器中の黄金佛	73
虚飾紳士	75
令嬢の激怒	79
冷罵官教師を走らす	81
西洋人は贅澤だ	85
雪隠での挨拶	87
黒奴の面の悪さ	88
湯屋は何處か	90
貴夫人の寢室へ飛込む	92
粟で腹を肥す事三日	95
町角でズドン	97
裸體の角闘	98



手函

毛布



秋  
澁

横濱を出帆して晩香坡に向ふ、「カナヂアン、パシフィック會社」の定期船、エムブレスの各號は、十四日間、山も陸も見ぬ、渺々たる大海原を渡るのだから、船客は無論、非常なる無聊に苦しむのである。



之れを慰める爲には、随分至れり盡せりの方法は、豫じめ講じられては居るが、又船客も、新奇の方案を考へだして、面白可笑しく日を消す事に務める、

或る日の事、英人某の發起で、戶外遊戯會を甲板に催す事になつて、各有志者よりは、夫々の賞品を寄附する事となつた、

恰も伊藤侯が 英皇即位六十年式に赴くが爲め、エムプレスインデア號に乗り組

んで居られたから、委員の一人は侯爵に向つて其事を依頼したから、侯も快諾せられて携へて居られた、美麗なる金時繪の手函一個を委員に渡した、サテ、船客は皆日本の地を踏んだもの斗りだから、誰しも此手函が貴重な品であるといふとを知らぬものはない、て忽地非常な評判となつた、委員等は種々協議の末、再び侯の許へ來て如何なる方法を以て、此手函を賞品と爲さうかと謂ふて、侯爵の意見を問たから、

侯爵は熟考の末、別に方法などは御差圖申すだけの必要がない、が成るべく貴夫人令嬢方の遊戯の賞品として差上りたい、と答られたから、委員は早速此手函を、數百

ヤード競走の上、一定の加算問題を精確に解釋したるものに與へるとに決定した、偕當日となつたが、幸ひ波濤も穏であるしするから、甲板上の遊戯には尤も適して居るのみならず、婦人達は皆侯爵寄贈の金時繪手函を、我物とせんとの意氣込は中々盛んなものであつた、彌々番數も進て其競走となつて、十五六歳位の令嬢達を初め

とし三十前後の夫人は勿論、白髮斑の老媪に至る迄、手輕の扮装に、列を正圖の一層を待つ鹽梅は、到底羞づかしがりの日本婦人などにて見るとの申であつた、

誰れしも可憐の少女等に肩を入れぬ野暮漢はあるまい、況んや寄贈主な

於てをやてあるに違いないのである、片唾を呑んで勝敗如何にと注意し、然、月桂冠は英國人なる年齢僅に十五歳の令嬢が戴く事となつて、手函はに落ちた、喝采の聲は雲時の間は太平洋の濤聲を壓したと謂ふても過稱でない、西洋人が、東洋の大政治家と目してゐる、伊藤侯の賞品を受けたる令嬢は、面侯爵より手函を領收すると同時に、函の裏には侯爵が各國の勳章を帶て寫された、一葉の寫眞に、博文伊藤の署名があつたから、其の悦しき様子は譬へんにもなく、侯爵に握手して懇ろに禮を述べた姿は、今に余が眼底に残つて居る、實に嬉は之れを無上の榮として子々孫々迄傳へると謂ふて居つた、

金蔭繪の手函一個今何處にあるか、爾來年を閲する茲に六年、汝は今や必ず新夫新婦の、兩々相對する樂しき一室に於て、如何に汝は太平洋上の好紀念を、當時の花

の如くなりし令嬢に繰返へさしむるか、

手函汝は彌々愛重せられて萬金の棚上一層の光彩を放つならんが、翻つて汝が花主人は如何に……吁々

### 船中の美人と酔漢

無聊は感ずる、退屈はする、加之に十四日間に同じ日(アンチポード、デー)を二度繰返すとがある騒ぎ、なにが先づ一番太平洋上の船中で目に着くかと謂へば、矢張美人である、兎角美人が居らぬと、船客の氣が引き立ぬもので！美人でなくとも、一寸垢の抜けた粹造の女でも居れば、必ず夫れが日々の談話の燒點になるのだ、誰しも自惚根性のないものはない、己れこそ既に其女の意中の人にでもなつた様に信

じたくもなるし、又吹聴したくもなるものだ、インヂア號上に實に目の覺める様な心地のする愛蘭産の一人が乗つて居た、果して此美人が出帆後間もなく船中の明星となつて仕舞たので、彼方でも美人じゃ、此方でも奇麗じゃと、賞賛の聲は湧く様であつたが、此美人は、時と姿を甲板上に現はすのみで、悠然人をして御姿を拜ませぬのを誰しも歎じて、何となく物足りぬ様な感を起して居た、のみならず、此美人の面には、一種謂ふべからざる愁色を帯びて居るから、何かそれには理由のある事だらうとは、一般の輿論であつた、人に姿を見せるを羞づるのか？、夫れども、没趣味なる多くの船客どもを嫌つて、獨り我室に呻吟して居るのか？、果た船暈に苦しむのか？など、噂とりくであつた、或日の事、船客は喫煙室に集まつて、骨牌を弄するもあれば、將棋を戦するもあり、また一杯の酒に喉を濡ほしつ

、談笑に餘念もなき一群もある、其處へ軀幹長大容貌も立派で、態度も先づ上流の紳士らしい一人が現はれて、最初の中は極々穩に酒舖の机に倚れつゝ親しき二三の友と愉快氣に打ち興じつゝあつたが、各々酔のまはるにつれ其の紳士は酒癖があると思へ、眼は血ばしり、怒聲雷の如く、終には手に觸るものを捉へて擲げるといふ仕末、船客は唯々呆然として怪我でもせぬ様にと各己が室に退却する、酔漢は益々暴威を逞ふして、終には小机を力に任せて抜き取つて振り廻す、傍に居る輩には喧嘩を吹き掛けるにあらざれば、鐵拳を喰はすといふ實に手のつけられぬ狼藉、ボーイは来る、船員は来る、寄つてたかつて終に彼れを室に退退かした後は地震の止だ時の様な心持かして一同はほつと一息仕たのも無理ではない、世の中には随分馬鹿者もあるものだ、甘い酒を錢を出して呑んで、そうして人から嫌はれる種を



時くとは經濟にも不經濟にも、理屈實際兩つながら外づれて居る話じやないか、西洋人の地位もあり可なり學問もある人の酒亂は其時初めて見たが、矢張日本人のど違ひはない、先づ見つとも宜くないのだ、

爾來數日美人の影も見えず、醉漢の消息も聞ずして居つたが、或夜風靜かにして浪路の末に月色淡き頃ほい、船頭に悄然として現れたる兩個の人影がある……、互に手を執り欄干にもたれながら、睡げに語る鹽梅は誰しも岡焼たらざらんとして能はざつた、密に近寄りて熟視すれば一個は船中の明星、一個は醉漢、そのコントラストの甚しきには一驚を喫したのである、然し船客簿を檢ずれば、矢張夫婦！

禁喫煙！

船中では喫煙室の外何處でも喫煙するとの出来ない様に嚴禁して居る、唯自分の室内では内處で時にはバック／＼するとも出来るのだ、適々島村速雄(海軍大佐)西園寺龜太郎(第一銀行東京支店長)山口某(領事補)の三氏はインヂア號上室を同うして居るが爲に、自然其室は日本旅客の集會所となつて仕舞つた、當時上等室に明きがない爲に溢れて下等室に居る一士があつたが、其人、豪宕にして一種東洋流の豪傑風がある、常に他客より下等視されるを憤慨し且は食物の粗悪なるに辟易し、終日己れが室より脱走し來つて、所謂集會室に來り、放談高論時には煙草も喫する、時には轟然クルツン砲を打ち放ち四隣を驚すとが度々ある、夫故近邊の船客等は、大に蠻勇を演ずるを苦々敷とに思ふうちにも、某西洋夫人の如きはどうかなしして一番此集會所を解散せしめたいものだ、船暈に苦しみつゝ其手段方法を講じたもの

と見えるがまさか、隣室で放屁の聲が喧しいからと謂ふて苦情を持ち出す譯にも行かない、或日集會所は開けて、相替らす會員は集合して氣焰當るべからざるの有様なるに、搗て、加へて某士發砲の聲は般々として物凄う聞へるのである、流石我慢せる夫人ももはや猶豫ならずと、呼鈴を鳴し侍僕を招きて、隣室に於て誰れか煙草を切りに喫するものがある、嗅氣紛々として坐に堪へるとが出来ぬ、早く規則に準じて嚴禁の命を傳へよと令したから、侍僕は倉惶て集會所に來つて嚴かに、會員一同を詰責し將來を戒めんとしたが、恰も其時に誰れも煙草を喫して居らなかつた、奇なる事を申し來しものかなと一同一寸頭を捻つた處、理解つたく、煙草に非ずして實は砲聲を禁ずるといふの事ならん、砲聲を禁ずるといふ條文は船中の規則に掲げてない、宜敷一矢酬さるべからずとて、某士は直に侍僕に答るに、本日此室に於

て喫煙したるものは一人もない、夫れを詰責さるゝ理由がないと信ずる、なるほどたれか發砲はしたものがあつた、然し發砲を禁ずるの權は誰にもないのである、去つて旨を汝が主婦に傳へよ、侍僕答ふるに由なく、戸を排して悄然立去らんとすると某士又一發侍僕の襟を捉へて「謹で汝主従の健康を祝す」……

### 大自惚紳士

齒の浮く様な氣隙を吐き且つ演じつゝ社會を横行するものをハイカラといふか？半熟の洋語を無暗に繰なして政治論をなしつゝ慷慨家を真似るをハイカラといふか？諂諛を事として王侯貴人に取り入つて名利を求め榮達を希ふをハイカラと謂ふか？鼻毛を延しロクロ首然として芬々とコスメチックにホワイトローズの香を積し蛇蝎

視されながら自惚極まるものをハイカラと謂ふか？蓋し概して身の程を知らぬ山杜鵑、自から血を吐いてのたれ死ぬ様な奴郎をハイカラと謂ふのだらう、前に述べた船中の美人に懸想した一日本國民があつた、美人は彼れを何處の馬の骨かと位に思つて更に氣に懸ても居らぬだらうに、此方では百度以上の大熱々々で、自稱色男たるとを吹聴せんとて、或は美人が艶書を送つて寄したとか、或は秋波を送つたとか！亭主があるから有夫姦罪に陥ることも知ずに勝手次第の自惚サ加減！同國人一同は、片腹痛く苦々しき顔をする斗りて、先づ痴漢の寢言と思つて閉流しにして居たが、彼はなかく冷罵されて居るとは氣附ない、十四日の航海も無事に終り、晚香坡を流笛一聲後にして、ロッキー山の山嶺なる、グラシエーハウス(氷家)といふ一驛に到着した、美人夫婦は此處で下車し、一二日間此邊の風光を楽しむ考へであつ

たと見へた、大自惚紳士の胸中には如何、彼れ恐くは此處にて下車しなかつたのを口惜く思つたに違ひない、數十分間後、彌々發車し初めると、彼の美人はプラットホームに佇立しつゝ、切りに手巾を振り居るを見て、傍の友人が「ナイ、君あの美人が切りに手巾を振りつゝ君に訣別の意を表して居るぜ」ウーソソカ、氣付なんだ、成る程……と謂ひながら軀半分を窓からだして、手巾を振る、帽子を振る、恰も相撲狂が最負力士が勝つた時の様子である、友人は其の狂態に見兼ねて居たが、不圖傍を見廻すと豈圖んや、美人が訣別するは隣室にある別個の紳士であつて、己が友人に向ての訣別に非ざるを心付いた故「ナイ……君美人は君に訣別の意を表して居るのじやないぜ、止し給へ」との忠告に、彼れ少く閉口の氣味であつたが「ナニ、僕にだよ、隣にだよ、隣の奴郎が何處に色男の價値がある……馬鹿

ナ……」平然として衆人の笑ふも知らず影の見へぬ迄に振つて振つて振ぬいた、

### 家が歩く

加奈多大鐵道會社長が、特に藤侯の爲に「モントレノール」より送致して乗川に供せられた一車は、實に我々を驚しめた、到底日本は勿論、歐洲へ行つても斯程迄に贅澤を盡して製へたものは見た事がない、先づ談話室が凡そ八疊敷斗りて、美麗な絹布で張り詰めた椅子腰掛はもとより、机掛からランプに至る迄、奢りに奢つたものだ、殊に三方は二重の玻璃窓で、一列車の最後方に連結されてあるから、充分風景を擲する事が出来る様になつて居る、寢室は六疊敷計りの二個で、寢臺の如きは夫婦を寢かすとの出来る程の大さで、大鏡から箆笥、化粧臺迄一々備つて居る、

湯殿は狭いながらも、氷塊を融して之れを沸騰せしめ、何時でも客人の用に供する様になつて居る、食堂は充分六人以上の客を招くに適して、小なりと雖、實に一個の小氣味よき程奇麗なるものである、其他料理場、雪隠等、總て完備せざるはななく、食物の如きも總て大停車場へて豫め用意して、新鮮の肉類野菜等に至る迄積み込む仕掛けになつて居る、所謂痒い處へ手の届くは之れ等を謂ふのであらう、初め、晚香波を發車する時分に一同唯其構造の美に驚き呆然たるのみであつたが、乗車して見ると其乗具合の心地よさ、日本などに居つて窮屈極まる汽車でをちく眠るとも出來ずに盡夜苦しむのとは趣を異にする、夫だから汽車に乗つて居るとは思へない、彌々發車の時刻となつて、晚香波市民歡呼の聲に送られて、徐々と汽車が動き初めると某士絶叫して曰く、「オヤ、家が歩く」

裸體の狂奔

どれ程大厦高樓を曳きつツて行く様な鐵道でも四日も五日も没趣味な新大陸の平原をのべつに通られては閉口するし又考へると矢張り別荘にても居つて静養して居る方が勿論面白い、晚香坡を發して數日の後モンテレーに着き同處最大の旅館ウインソル、ホテルに投じ各個席を定めて塵衣を換へんとするに餘念なかつた、某が室には浴室もあるしするから就寢前久振で一浴を試み悠然横臥して居ると、藤侯の衣服調度の世話する爲に隨行せる從僕時岡某なるものが來て一浴を許せといふから快諾して某は新聞を讀みつゝ轉た無何有の郷に遊だ、と思ふ間もなく浴室の方で切りに〇〇サン〜と呼ぶ聲が聞へる何事が起つたかと心配しつゝ走せ行き見るに時

岡氏は顔色を青くし赤裸々て切りて滾々として湯の迸り出る嘴管を指し「先きからいくら栓を振ても湯が止りません、もう少して此の通り一ばいになつて仕舞ますから室内の立派な毛氈の上に溢れたら大變です、どうしたら宜しうございませう」との相談、某も一時は當惑したが急に一案を案じ、先づ何しろ桶の底の湯口を開き給へ然らば水の桶外に溢れるとはあるまいと教へた處早速實行した故先づ面目玉を潰す虞れだけは無くなつたが、某は時岡氏と如何程同心協力しても迸る湯を止める事が出来ない、余儀なく呼鈴を鳴して僕を呼んだ、現はれたのは一個の黒奴である、彼れは直ちに雑作なく馬鹿〜しい程容易に水口を止めて時岡の赤裸々として稀代の一品を狂奔の餘り隠すを知らずに茫然として居れる姿を顧みて、忌しい様な嘲罵の口調を以て「ハーン日本人は御體が御白う御座ひますよ御見事……」流石の

時岡も赧然として慙ぢた様子、某も傍杖を喰つてウッフ……

### 新世界の浴とはこんなものか？

紐育市の最大旅館はウオールドルフと稱つて、輪奐の美、規模の大、待遇が善くて、加之に宿賃の高き、如何なる方面から觀ても世界無比といふとは誰も争はないのだ、郵便局も、電信局も、理髮所も、何から何迄ホテルの一軒中で用がたりる、まして美装せる小童が聲朗かに断へず相場の高低を叫びつゝ歩くなど、他の處では見るとも聞くととも出來ないのである、食堂といへば夏冬とも綠葉と紅花とを以て飾られて目の覺める様な心地のする一境を形造り、山海の珍味は思ふに任すと云ふ位の贅澤其最上等室に投じたのは藤侯の一組、呼鈴を押せば湯、水何れでも意の儘に持ち來

る工合は王侯宰相でも是れ程迄の驕奢は盡しきれまいと思はれた、

隨行員某は長途の瀟車に痼疾再發して苦しむが爲め湯浴を無上の快として紐育へ着くや否や、先づボーイに命じ浴室に案内せしめて内に入つて衣を脱し、桶の邊噴管を開きし處好温度の湯は迷しつて桶に入るけれども桶底の口が閉ぢてない爲に如何程苦心しても充分に湯は溜りに流れ出て仕舞た、成る程新世界の浴はこんなものか、一滴の濁水でも停らせずして去らしむるは妙實に至れり盡せりだが、なにしろ餘り心地よいものでないのは、湯の量僅に踵を没するに過ぎない一事である、故に某は暖を取ん爲に或は匍匐して、平蜘蛛の如くなつて見たり、或は仰て大の字なりをして見たが、思ふ様に軀躰が暖らない、幾十分経つても出浴するとが出来ないで大に苦しむで居る處へ、切りに戸を敲くものがある、是れ例の時岡氏で「〇〇

さんく候爵急に御用です」出浴を促すと甚しいから餘儀なく衣を纏ふて浴室を出ると彼れ喜色満面「ドウデス御湯は？」「新世界の浴はこんなものか驚いて仕舞つた！」

豈圖んや時岡は投宿するや前徹を踏まざる様に先づ浴室の鹽梅を撿し桶底の口を閉塞する方法を聞きをき、某をして大に苦しませしめ様としたのであつた、彼胸を撫てをろして、「私の裸見物料を慥に頂戴致しました、」

### 劇場の改築（片山技師の論）

著者は紐育に滞在中不圖宮内省より派遣されて、建築調査の爲に旅行して居る片山技師の一行と旅宿を同ふした、或日話が劇場の改築論に亘つて種々な議論も湧き出

て建築家としての論ずる處をも大に聞くを得たが、同氏の謂はれるには、全日本芝居に於ける花道と謂ふものは必要のものなるか否や、劇場の構造上より考ふるに、花道の處は劇場を支ふべき大柱を建ねばならぬ緊要の場所であるのだ、是非とも日本の様な火山質の地震多き邦に在ては、劇場の如き群集を容るゝ建築物は、堅牢の上にも堅牢に造り上ねばならぬ譯であるので、随分種々研究もして見たが、わの花道だけではどうか取除きたいものだ、然し其花道廢止論は建築上よりでなく、文學上よりは如何なる性質のものかと、切りに質ねられた、彼の學海翁の如きも花道全廢論を唱へられた一人である、余もまた最初歸朝した時分には大々的賛成者の一人だつたが、漸々日本の風物を熟知するに従つて、學海翁の所論と意見を異にする様になつた、片山技師の論ずる處は勿論建築上より然あるべしと思はるゝ一種の議

論なるが、扱今日花道を單純に取除くといふとは如何あるべきか、余も充分歐洲諸國の演劇を観察して、然る後日本で御話しを爲ようと其折は袂を分つた、爾來片山氏と相見るの機なく同氏は猶ほ花道廢止論を確守さるゝや果た又建築上より花道を殘しても危嶮なき好案を得られたか聞きたいものであるのだ、

### 自宅不分明

佛都巴里にコンチンタンホテルといふ廣大な一館がある、或る夜の事遅く豊顔疎弄の日本の一紳士が夜番の許へ來て英語を以て「吾輩の室は何處だ、忘れて仕舞つて實は歸へるとが出来ぬ」と突然問ひ掛た、夜番なるものは、單に夜十二時過を警戒する職務に従事する役を帯びるのみで客室の番號などを承知して居らないから答

に甚だ當惑して居る様子を、紳士は見て、懷中より十法（一法は四十錢）の金貨を出し彼れに與へた處萬事金の力なる巴里の事故、彼れは欣然として其紳士を伴ひ、帳場に至り眠に就きたる番頭昧の者を起した、番頭は不平面をして何用かと、如何にも無愛想に夜番に問ふ鹽梅だから、紳士は又懷中より十法を番頭らしき者に與へた處、これまた金の光に目を覺して、喜色滿面紳士の姓名を問ひ糺して帳簿を調べ漸く室の番號を教へた故、夜番に伴はれて、今や留守居せる秘書の某が侯爵の歸り遲きを案じて探に出んとする處へ歸られたから、秘書は「閣下、如何なさつたのです、非常に遅ひお歸りではありませんか」「實は吾輩室の番號と幾階目の室といふとを頓と忘れて仕舞ひ、此廣い旅館を幾週したが何にも判らんで……、まゝよ廊下には絨氈も敷き詰てあるから隅の方へ轉つて一夜を明さうとは思つたが、萬一見



附かれば國の恥辱と考へたから、夜番の許へ駈付て自分の室は何處だといふ、馬鹿らしい演劇をしたのよ、ふらい高い家探し料だつた」と猶懷中を探つて十法を夜番に與へた、合計三十法、日本の時價に算すると大凡十二圓強、室一つの探し料にはさてもく、

賣婦の一驚

英國女皇即位六十年の祝典を拜まん爲め、處々方々より雲の様に簇り來たつた幾百萬の士女は、殆ど世界第一とも謂はるゝ倫敦の都大路から溢れん斗りの有様であるまして此機を外さず、外國人等の鼻毛を敷へて巨利を博せんと腕に縷をかけて待ちかまへたる賣婦どもはピカデリーの辻から「エンバインア「アルハンブラ」の劇場邊

に幾千となく立現はれ流行の帽子に輕羅錦繡を纏ひつゝ、妖術を逞ふせんと、をさく意りなく蚤取り眼で好き鳥もがなと番する處へ、通り掛つたは年頃五五六の一紳士、何處となく氣高き風采に、流石老練の一賣婦は目を留め、つと傍に寄り添つて「モン貴君、妾と一處に何處か一杯召上りませんかと色氣たつぷりに持ち掛けた處、紳士は女を一瞥して、姿の美しさに恍惚とした様子で、直に應諾の意を表した、恰も其邊を通り過ぎんとした辻馬車を招きて、互に手を携へて睦氣に之れに乗るや否や、女は馭者へ何處と命ずると、應來の一聲馬頭は女の家に向つた、流石は客を遇するに慣れたる一賣婦、至れり盡せりの款待に紳士の悦びは譬るに由なく、快よく一夜の夢を結んだのである、翌朝紳士は其女に別れ際に、枕價を問へるに五磅と答へたが、懷中には十磅の紙幣のみしか用意されて居らない、儘よ十磅

では廉いものだと無雑作に剩餘錢は不入用と謂ながら、ツト其家を立去つた、  
 茲に數年間卑しき營業を爲しつゝ幾千の郎にも接するが、多くは五磅と謂へば參傍  
 にしろと値切るが習ひ、然るに五磅の紙幣がないからとて其倍額の金を容易に與へ  
 る人は、唯の髯じやあるまい、風采といひ態度といひ、なにしろ六十年式へ參列に  
 來た立派な日本紳士ならんと目星を付て、翌晩エンパイア座へ行くと、果せるかな  
 二三の日本紳士が逍遙して居る、其中の一人は日頃親しい間柄ゆへ近寄て「モシ貴  
 下は日本の御方で年の頃五十五六の髯を生して右の眼の下に大きな黒子のある紳  
 士を知りませんか」と問はれて「ウン知つてをる」誰れです」「彼の方かあればさら  
 有名な〇〇さ」と謂はれて賣婦は自らの慧眼を自ら賛して、爾來我れは〇〇と枕席  
 を交へたりなど、鼻高々と日本人さへ見れば大自慢、嗚呼女子と小人は近くべから  
 ざるものかな、

雪隠の番人

春浪といふ一生成日某侯爵式部官と巴里を散歩して居つた、適激烈なる腹痛を  
 感じて辻雪隠に飛込んとすると雪隠の番をする老媪遮つく曰「満員々々」と一生成  
 儀なく尻を押へて某街の大珈琲店へ駈入りながら「〇〇さん失禮暫時御待ち下さい  
 と姿を隠した限り殆ど一時間近く現はれて來ない、然るに〇〇侯爵は佛語を解しな  
 いが爲め茶を命ずるとも酒を取寄するとも出來ない、入りかはり立ちかはり用を聞  
 に来るボーイと、唯顔を見合せながら、今に話の判る人が彼方から來る暫く待てと  
 の意味を手眞似で幾度もなく爲るうち追々退屈しはじめた、凡そ世の中に待せらる

「程時間の長く思ふものはない」「春浪め何をして居るか、まさか雪隠から何處かへ逐電もしまし、失敬な奴だ」と疝氣はむらくと起り居る處へ悠然と「嗚呼これて體か軽くなつて安心した、先刻は途中で氣絶するかと思つた位苦しかった、日本人が冀詰りて立往生したなどと新聞にでも出されては大事だつた、然し痔の爲め強い長雪隠嘔御退屈様！」と平蜘蛛の様に辨疏するかと思の外の平氣さ加減に〇〇侯爵は忿然とし「チイ君……僕を誰と思ふか、苟も侯爵といふ門閥ある一人位階勳章ある身といふとは君も能く知て居るだらう、夫れを幾ら語が判らないからと謂つて、一時間餘も雪隠の番人をさせて置くとは重く不埒千萬じやないか」と語氣せはしく頭から叱り飛しに掛つたが、春浪は一向無頓着で病人は病人仕方がないサ茲我慢をする程せつないものはないです侯爵も何もかも有つたものじやないそんなに怒り給ふな、チイ僕麥二杯持つて來い」怒り漸く解けた後は何日もの大陽氣、

### 西洋人は寒いとを知らぬと見える

「エ、ベラボ！ニ寒い、なんぼ西洋人だつて神經はあるに違ひない、夫れに蒲團も掛けずに眠るとは實に驚いて仕舞ふ、殊に日本ならまだ九月の初だから左程寒くもなくどうやら我慢が出来るだらうが、巴里は丁度十一月頃の寒さだ、掛蒲團なしの修業も一つの修業かな、然し随分酷い修業だなア」と獨語するは昨夜初めて花の巴里へ着いて或る一館に投宿した某である、見るもの聞くもの總て魂を消すばかり、見たよりも、聞いたよりも、百増倍立ち勝つて居る巴里の美しくしさに、恍惚とりとして仕舞た鹽梅は所謂河童に尻子玉を抜き取れたも同

「エ、ベラボ！ニ寒い、なんぼ西洋人だつて神經はあるに違ひない、夫れに蒲團も掛けずに眠るとは實に驚いて仕舞ふ、殊に日本ならまだ九月の初だから左程寒くもなくどうやら我慢が出来るだらうが、巴里は丁度十一月頃の寒さだ、掛蒲團なしの修業も一つの修業かな、然し随分酷い修業だなア」と獨語するは昨夜初めて花の巴里へ着いて或る一館に投宿した某である、見るもの聞くもの總て魂を消すばかり、見たよりも、聞いたよりも、百増倍立ち勝つて居る巴里の美しくしさに、恍惚とりとして仕舞た鹽梅は所謂河童に尻子玉を抜き取れたも同

様、

様子も判らず、さして語も通せず、啞聲も同様なる某は迎ひに来る人が来なければ  
 一歩も體を動すとの出来ない果ない身分、時計の針を敷へては最早迎が来る時分と  
 切りに心待に待つて居た處へ、飛込だは昨夜約束しておいた、土地には數年も住慣  
 れて居る日本人某である、其日は打連れ立ちて都見物をさして貰ふ筈で、それく  
 衣服を着換へて外出せんとする處へ、不審顔に入り來りしは此館の一僕で、友人  
 に向て何か心配氣に問ふ様子、何の事やら更に某には判らぬけれども、どうやら寢  
 臺云々を話す様子であつた、友人は聞終つて「オイ、君昨夜君は感冒を引はせなか  
 つたかと僕が心配して居るぜ」渡りに船と「寒かつたさ實に巴里子は豪と僕は思  
 つて居るのさ、掛蒲團もなしで寝るのだもの」と答へたら、友人は失笑しながら

一生の手を執り教へるから「此方へ來給へ」と導かれて昨夜眠りし寢臺に近寄り「君  
 西洋の寢臺は掛蒲團の無い様に一寸見えるが、そら此處をまくと整然と毛布が敷  
 布に包んであるのだ、此の間へもぐりこむのさ、夫を君は知らないで突然此の上へ  
 ごろりとやらかしては寒いのは當然だ、西洋人だつて日本人だつて寒暑は等しく感  
 じるよ、この位の失策は恕すべしだが、随分注意し給へ」と某は一言もなく「なる  
 程！」

昇降器中の一晩

旅館を出る時分門番が「今夜遅く御歸りになりましたら、この鈴を御鳴し下さい、  
 直ぐに戸を開けます、而して家の中に御入りになつたら此の昇降器の戸を開けて静

に御締めになつた上、静に御締めにならないと出られませんよ——この綱を曳けば宜しう御座いますよ」と丁寧らしく綿密に教へて呉れはしたがまだ充分に納得する説明には受取れなかつたが、なにしろ通辯入の事故大概の處で判つたとして半嚙のウイ／＼位をやらかして巴里見物にと出掛けた、當時は千八百八十九年の萬國博覽會開設の時代で、市街の繁盛は東洋から來た田舎者の目を眩まし腰を抜さん斗りで、唯友人に伴はれて朝から晩まで、ノソ／＼と四方八方歩き廻はつて、ヘト／＼に疲れて門口迄送られて歸つて來た、朝教へられた通り鈴を押すと自然「ギューツ」といふ音がして然も大戸が何の苦もなく開いたのが早や既に面白い先づ第一門は無事に經過した、さて次は昇降器の一關である、薄暗い瓦斯の光に昇降器の入口は判つたから先づ安心と倉惶入るとたんに靜に閉ぢよとの命令を忘れてビッジャリとやら

らかしたが、後の祭で後悔しても仕方がない、夫れよりは綱を引けば動くといふから早く自分の處へ着きたいと思つて、力を籠めてシート綱を引くと昇降器は徐々に動き初めて、ドシ／＼上に昇つて行くうち自分が下りねばならぬ階段の前をア……といふうち通り過ぎて、一番頂上の處へヘタリと附着して、これではならぬと思ひ下へ綱をたぐると、今度はズ……と下へ降りて仕舞い、自宅の前は遠慮會釋なく通り抜けて、階下の土間へヘタリと着く、もう一度／＼と凡十四五度も試みたが如何しても自宅の前で止める方法を聞かずに仕舞つたから、何度試みても成功する筈はない、儘よ斯んな事をして居るよりは階子段を降りた方がましと考へて、昇降器の入口を開けんとすれば、開けばこそ動けはこそ、最早此の仕末では策の施すべき道がない、寧ろ昇降器中に一夜を過すに若かずとて高く昇降器をたくし上げ、

其の中に悠然と眠り初めた、翌朝門番は昇降器のなきに驚いて駆け上つて来て外より覗き一驚又一驚、漸く手真似て語が判り、其説明の不充分であつたを氣の毒がつた、

### 瓦斯を吹き消す

「全體我輩は文明の利器てふものに感服せぬこの瓦斯とふものは一種不可思議の悪臭などを放つのみでなく、怪光目を眩するは腹が立つワイ、我輩の如き郷關を離るゝ三千里外の天涯に在つては矢張孤燈耿々といふ鹽梅に逆旅の趣がなふては興味が薄いてふものだろうも夷人のやりあるとは癢に觸るワイ」と肩を貸しつゝ、絨氈の上に大圓生をかいて大氣燄を吐いて居るは、名士丸山作樂、處は英京倫敦のアツパーウ

オポーン、ホテルの一室である、夜も闌け亘り四隣も静まりし頃、瓦斯の嗅氣は鼻を衝いて來る、ホテルの主人は驚起處を搜索すると、源は丸山氏の室にあるらしいから、氏の處へ飛込むと、果せるかな、瓦斯燈口より瓦斯は漏れて、室内に朦朧として居る、急いで栓を閉ぢ窓戸を開放した、其處へ又此騒動と嗅氣とに目覺して駆け付たる日本人數名は丸山氏を取圍み、「貴君どうなさつたのです、幸ひ窓が開て居たから窒息せず済みました、瓦斯口の開放しは非常に危険です、何の必用で火も點けずに瓦斯口の開放しをされたのですか」と切りに尋問されると丸山氏は平然として「瓦斯てふものは頑固な奴郎ですな、我輩は彼を吹き消すに力を盡したのだ、なか／＼消えんが魔力人力に及はず、とう／＼やつつけてやつたを遺恨に思つて、思ふ存分毒煙を吐き散らし

「ナアー」と衆人嗷然として、謂ふ處を知らず、唯々丸山氏の呼吸の強さに驚くのみであつた、

### 子供でもしやらツクさい

丸山氏一日巴里の廣小路シャンゼリゼーを散歩した、丁度日照の事て人馬絡繹として織る様だ、大衢の兩側なる公園には兒童の嬉々として戯れ居るを見て、丸山氏は茫然として杖に身を持せて餘念なく見とれて居つたが、忽ち傍人の肩を打ちつ、「チイ君アンナ五歳か六歳の小兒でも矢張外國語が話せるが、驚くナア——」

### 血染の犢鼻褌

野呂間某なるものがあつた、某裁判所の検事を奉職して居つたが、一朝抜擢せられて歐米巡回を命ぜられ巴里まで漸く辿り着いたが、更に外國語は話せない、在留日本人の保護やら公使館の周旋やらで巴里見物丈は済まして、彌獨逸伯林に向ふ事になつた、そこで公使館員の某は白紙の片へ「此人は外國語を解せず、向ふ所は獨逸伯林なり、沿道諸彦の援助を仰ぐ」と書き記しステーション迄送つて涼車に積み込み、萬一の事あれば其紙片を鐵道役員に示せば無事に伯林迄到着すべしとて互に袂を分つた

「ローギユといふはライン河畔に在る麥酒の名産地であるから停車すると「ビールはよしかなく」と賣りに來る聲喧しい、野呂間氏下地は好きなり御意はよし、懐中を探つて金貨を出しビール屋を召ひ寄せ四五杯駆け續けにわほつた上に猶三塚程

「ナアー」と衆人嗥然として、謂ふ處を知らず、唯々丸山氏の呼吸の強さに驚くのみであつた、

子供でもしやらツクさ

丸山氏一日巴里の廣小路シャンゼリゼーを散歩した、丁度日曜の事で人馬絡繹として織る様だ、大橋の兩側なる公園には兒童の嬉々として戯れ居るを見て、丸山氏は茫然として杖に身を持せて餘念なく見とれて居つたが、忽地傍人の肩を打ちつ、「チ、イ君アンナ五歳か六歳の小兒でも矢張外國語が話せるが、驚くナア——」

血染の犢鼻褌

野呂間某なるものがあつた、某裁判所の検事を奉職して居つたが、一朝抜擢せられて歐米巡回を命ぜられ巴里まで漸く辿り着いたが、更に外國語は話せない、在留日本人の保護やら公使館の周旋やらで巴里見物丈は済まして、彌獨逸伯林に向ふ事になつた、そこで公使館員の某は白紙の片へ「此人は外國語を解せず、向ふ所は獨逸伯林なり、沿道諸彦の援助を仰ぐ」と書き記しステーション迄送つて汽車に積み込み、萬一の事あれば其紙片を鐵道役員に示せば無事に伯林迄到着すべしとて互に袂を分つた

「コローギユといふはライン河畔に在る麥酒の名産地であるから停車すると「ビールはよしかなく」と賣りに来る聲喧しい、野呂間氏下地は好きなり御意はよし、懐中を探つて金貨を出しビール屋を召ひ寄せ四五杯駆け續けにあほつた上に猶三塚程



伯林迄の用意に買入れた、發車後間もなくビールを飲むだが爲め小便がしたくなつたが、何處で何分停車するのやら更に判らない、て一案を出して購入れた一塚の口を窓の側にて破碎し中をば、總て腹中に流し込み、密に塚を膝掛の下にもぐらして、快く塚中に放尿して知らぬ顔に窓から打捨て、仕舞つて後は微塵を帯びて華宵の園へと遊んだ

やがて伯林に着たから車掌は起しに来る、又豫め通知し置いた爲め日本人の出迎もあるしして停車場より馬車を駈り一旅亭に投じ、旅装を更めんとて上衣を脱して見れば白シャツの下半及犢鼻褌は鮮血にて濡れて居る故、氣絶せん斗りに驚いて熟驗すれば豈圖んや愛兒の負傷數十個所、蓋し破壊した塚口の凸凹甚しき爲めに如斯る慘然たる有様を呈するとなつたのであつた

### 子爵の今羅漢

子爵三島彌太郎氏が病んで巴里に滞在中の事である、追々輕快に赴いたので一日久振りにて理髪をしようとして考へて之れを同宿の友人○○氏に相談した、友人も賛成して幸天氣も好し、病人がぶら／＼出遊するには適當の日和だからとて、相携へて友人は通辯がてら理髪所に出掛たが、満員で殆ど座する席がない、しかし病人の事だし待せる譯にも行ないから、友人は理髪店の主人に頼んで、鏡の無い處でも宜しいから早く斬髪して呉れと頼むだ、主人も快諾して他の客を後にして仕事に掛り初めた、友人は切りに三島子爵の容貌を熟視して居たが、不圖思ひ付たは子爵は眼光の鋭き頭髪を巴里風にちいらしたら必面白い配合が出来たらうと悪戯を考へ斬髪

が濟んだ後、三島氏には話さず主人に縮毛を命じた、子爵の前には鏡もなしするから何をされるやら更に判らない、理髪店の主人が爲す儘に放擲して置いた處、漸く終つたから賃錢を拂つて立出た、友人は獨り胸中にクス／＼笑ひ、今に何と謂ひ出すかと思ひつゝ互に携へて家に歸つた、室に入るや子爵は朝子を脱し鏡に向ふとこはそもいかに、己れが頭は縮毛圈を爲したる恐るべき姿に一驚し、「チャイ君どうしたのだ僕の頭の毛は縮れ上つて仕舞つた、延す工夫はないか、又君の惡戯だらう、仕様がないな」と櫛て幾度かくとも伸びようともしない、友人は可笑さを耐へ「君、實に立派な紳士になつたよ、どう見ても舶來の羅漢とは君の姿の事を謂ふのさ寫眞でも撮つて日本に送り給へアハ……」

### 舞踏會より除名さる

そら大磯、そら沼津と日本などても夏になると海水浴流行で、猫も杓子も是非一度は暑中に出掛けないと神様へでもすまぬ様な考へて居るから自然諸所の海水浴場も賑つて、種々な趣向をして曳杖の客を釣りこもうとする、が佛國邊の海水浴場の趣などにはまだ／＼到底及ばないのである、

佛國の海水浴場の重なるものは、大概大西洋の海岸にあつて、七月頃からは非常の繁盛を極めて純然たる華奢の競争場となるのだ、夫故種々な遊戯場なども出來、玉突とか、小馬競争とかは勿論其うち尤も人の多く出入するは舞踏練習所である、或夏の串であつた、日本人の安藝某なるもの、避暑の爲めサントーパンといふ處へ

海水浴に行き無聊の餘り舞踏の藝古を爲さんものとして練習所へ加名を申込んだ處、彼方でも快く依頼に應じ呉れ、毎日夕方より教へを受くるとになつた、初めのうちは教師自から手を取つて一二三——一二三と足並を整へて、ホルカの稽古に餘念なかつたが、段々日を経るに従ひ安藝氏の藝も上達した、適大練習會を催すとになつて弟子共は今日を晴れと着飾つて、各面白可笑しく舞ひ狂ふ様は、實に一種の奇觀である、安藝氏も今日こそは東洋人の手並を見せ、貴夫人令嬢をして啞然たらしめ粹客通人をして後へに啞若たらしめんものと、燕尾服に白皮の手袋ウエルニーの舞踏靴を穿ち、ロシェーガリーの香水を顔はせながら意氣揚々と入場した、さて番組も進んでワルツの一曲安藝氏は日頃の手練を衆人に誇る此處なりと、直ちに向ひ側に控へたる容貌花を欺く一華嬢に相手たらんとを申込み、互に相擁しつゝ、跳り廻は

つて居るうち、調子づいて來たものと見へ安藝氏のとる手の力や強かりけん、アツトいふ間に令嬢をツツァンコロリと一二問も前へ投げ轉ばした、裳は腰の邊りまでまくれての醜態、髪に挿みし薔薇花は飛んで落花微塵、晴れの場所とも謂べき場合にての出來事故、一同は舞踏を止めての大騒動、令嬢の親は怒る、他の者は罵るといふ仕末、流石の樂境も忽地に殺氣紛々として來た、安藝氏は唯々平身低頭、過失を兩親に二言三言謝して冷汗をかきつゝ、練習場を遁げだして我寓へ歸つて來て、一息ホツト吐く間もなく、「へい御手紙」と僕の差出すを見れば、豈圖んや〜爾來練習所への出入を謝絶す

### 千法の紙幣で尻を拭く

〇〇〇〇〇 總長〇〇 狹路といふが初めて佛蘭西へ留學する時の事である、同行者凡四五名で、狹路氏は日本で佛蘭西語を研究して居た事だから一行の采領を託された四十日の航海も無事に済んで馬耳塞へ上陸し、彌く汽車で巴里へ向ふ事になつた馬耳塞から巴里までは、急行で行くと凡十一二時で着くのが通常であるが、急行だけに餘り多くの停車場に立寄らない、立寄つても極々短時間の停車だから、餘程物慣れた人でないと非常の失策をする、狹路氏の如き日本仕上げの佛蘭西語でどうやら、茶持つて来い、水飲せろ位の事は滞りなくやらかすのが出来たらうけれども、佛蘭西本國に行つて、ペラくど立板に水を流す様に喋られては、如何な大學者氣取の狹路氏も餘程まごついて、辟易したに違ひない、まして驛夫が奇聲奇音を發して何十分停車など、大聲疾呼されては、決して解るものでないのだ、

不圖、馬耳塞での食物にでもあてられたか、某停車場へ着く時分から非常の腹痛を感じて、昔日の氣焰更になき狹路氏は、驛夫の停車くの聲を耳にするや、車から飛出して紳士、淑女と記るせる雪隠へ駈込み、尻を落ち付けて用を辨せんとする一刹那、發車くの聲喧しく聞ゆる故、吃驚仰天して、紙を探せど不用意にも持ち合せがないので、隠しの中を探ぐると手に觸れた一片の紙がある、之れ幸ひと夫れにて早く仕末をして、漸く間に合つて其處を發車するとなつた、  
 巴里に着後一行の勘定をなさんと狹路氏は切りに精算すれど、如何にしても干法の紙幣一枚が不足なるに驚き、能く考れば〇の停車場の尻拭き紙として仕舞つたのであつた、

## この泥だらけを見給へ

パリや龍動などの交通頻繁なる場所、乗合馬車や鐵道馬車を一々紳士が車掌に留めさして昇降するは餘り外見の宜くないものだ、然し運轉中の昇降といふものは随分危険にもあるし、又轉かりでもすると不躰裁千萬だから、昇降に熟練せぬものは寧ろ恥を忍んで車掌に御願ひ申して、一寸手数を煩すに若くはない、然うてないと頓だ強い目に逢はされる、證據といふのは、

或る日本の役人(陸軍の理事と覺ゆ)がパリへ来て在留人の厄介になつて随分種々なる世話を焼かした、例へば日本などでは時刻關はずに湯茶又は麥酒などを飲んだりすれども、行儀正しい西洋では無暗に間食といふとはしないのであるが、夫れを

辨へずに途方もない時刻に葡萄酒を持つて來いなど、割烹店で命ずる様な冷汗の出る不作法を山々演じたあげく、友人等に伴はれて或處へ見物に行うとて、乗合馬車に乗つて彌々下車する頃はい、一友人は理事某に、「君はまだ馬車から降りることを知るまいから僕が先づ降りて車掌に車を留めさせる迄待ち給へさうせぬと非常な目に逢ふから」と呉々も注意して友人はヒラリと飛下りた、然るに理事先生は頑迷で注意に注意をしたが聞かないで、友人が下りると同時に未だ馬車の停止せぬうち、片足地びたへあるすと、註文通り見事に泥濘の中にめすつた様子は、ボンチ繪の標本に至極適して居つた、友人等は恥ぢも外聞も忘れて怪我でもせぬかと駆け寄つて介抱すれば、先づ何事もなくて無事息災ではあるが、着物は丸で泥だらけ、乗合馬車の小憩所へ入つて乾しなどし泥を落して他の馬車に打乗つた、

狭き馬車中故、成るべく低聲に話すのが他客に對するの禮なるに、理事先生一向無頓着にて天にも響けといふ様な大聲にて、友人へ談話を初めかけたので、友人等も辟易し成るべく應じない工夫にと、聞えぬ顔をして嘯いてをるのを、理事先生は聲が低ふて聞えぬものと、益々張上げるドゥマ聲、乗客の迷惑は如何斗りか推測られて友人等は冷汗を流しをるにも付氣ず、今度は口で謂つて聞えぬと感じたが、泥塗れなる穢なき兩手を差上げて「チイ諸君見て呉れ給へこの泥だらけなと——」一

座呆然、

### 娼樓の大騒動

旅の耻ぢは掻き捨てとは誰が言殘した文句だが知らないが、此頃の様に廣い世界も

漸々狭くなつて來ては迂闊した粗忽も出來ぬ筈、ましてや地位もあり責任もある身分では、上に居つては下僚の摸範とならずにはをられず、下に在ては上官に對する敬禮上、嚴正なる行爲をと心懸ねばならないのだ、然しながら誰しも見慣れぬ土地へても行けば、自然人情風俗の視察などと妙な理屈を付けて、時には青樓の春を密に買ふも無理ではなし、

偕四五年前、或る高貴の一行が巴里に御滞在中、屬僚等は長途の旅情を慰め且は巴里特有の娼樓の状況を探知せんとて、相携へて某街の一樓に上つて、女子等を相手に、ソレ三鞭ソレ麥酒と財囊の底を拂ひ盡しての大陽氣、こゝ斗りが春と見え、夫れとは知らずに或る貴顯、旅館に於ても無聊に堪へず、秘書を携へ久振りにて青樓見物にと歩を運ばれ、今しも多數の日本人が大浮れに遊ぶとは知らずに戸口を排い

て入らうとすると、遣手婆は嬉然としながら、「貴君方も二階の御連さんですか」と問はれて秘書は、「さては皆々内處で来てをるな、意地悪るく押掛て驚かしてやらうと考へ〇爵に話すと、」そは面白い何處に居る案内せい」との託宣に、遣手婆は二人を伴ひ、杯盤狼籍の一室に、「御連れ様」と謂ひながら戸を開いた、日本人等は見れば〇〇と其秘書の某「大變な處へ御入來、見付かつては必ず御小言頂戴」と、長椅子の下へ隠れるもあれば、また頭隠して尻隠すの狂態を演ずるもある大騒動、〇爵は手にて招きつゝ、「ナンダ野暮な……娼妓屋へ來ても構はないじやないか、びくびくせず此處へ現はれ給へ、一處に飲うじやないか」と磊々落落々として叱咤する處の騒ぎでなければ、一同は大安心と密々と這出て來りこれより打解けて又々の大愉快を盡したとす、

星亨の迷子

星氏保安條例に觸れて洋行中の事である、常に剛頑較もすれば人と衝突をする、巴里に滞在中は留學生を相手に「カルチエー、ラタン」の一珈琲店の樓上で骨牌を弄するとを無上の樂みとして居た星亨氏酒は大鯨の百川を呑むが如くであるが、決して女を近けない、故に斷へず酒氣は甚くとして人の鼻を襲ひ、癢に觸るとあれば、直に雌雄を腕力に依つて決せんとするから、大に當時の留學生等より嫌はれて居つた、一夕例に依て集會は開かれた、朝來星氏は何處か大に傾けたものと見え、平常の十數倍も酔つて居た、從て氣餒も高く、豪慢無禮の舉動が甚しいのを一同苦しく思つて居るうち、不圖喧嘩の花は開いて一場の大演劇を試みた揚句、一同は

星氏を獨り殘して立去つて仕舞つた、星氏は敵を失つたから腕の揮ひ様がない、何か口の中で不平を謂ながら酔歩蹠蹠として珈琲店を立ち出たが、非常の酩酊にて殆ど左右東西を辨せぬ位である、豫め様子を知つて居て小陰に隠れながら、舉動を探り居たる〇〇は星氏の後に尾行するとは知らぬが佛、星氏は宿に歸らんと彼方へヨロ／＼此方へヨロ／＼、どうやら寓の前迄は來るが、泥酔の爲に寓店を識別せずに通り過ぎて仕舞た、これから星氏は凡そ二三度も其邊を漂々とやつて來ては己れが寓は判らずに過ぎ行くのを、〇〇見兼ねて後より「星さん／＼如何しました」「どうする事も無いのだ家に歸るのだ」「家は忘れて仕舞ひなすつたか、先刻から幾度貴下の家の前を通り抜けるのです」「なに馬鹿謂ふな家は判つて居る此の少し先きだ好い心地だから散歩するのよ」「アモ貴下の家はこゝではありませんか」「知つて居るア」と傲然呼鈴を鳴しながら、

「アバヨ」

### 不熟練の通辯

大坂の一富豪の後見として歐羅巴へ遊に來た鈴木某なるものがある、巴里の美人に見惚れて圖らずも花柳の巷に一枝を折るとになつた、が某は佛語を解せないで兎角約束事などが頓珍淡になつて時々は一塲の小争ひなど惹起すことが度々ある、一夕美人は將に去らんとする某のカフスを促へて、「もし貴君明晩は屹度シルクデテールへ入らしやつて下さいよ」とやらかすと某はどう聞き違へたか否とこと答へた、美人は定めて何か遁れ難き差支へがあるので斷はるに違いないと推量して強ても謂はず



に其日は別れ翌晩一人でシルクへ出掛けると、否々と謂つて来るのを断はつた某が傲然と椅子に寄りつゝ何か傾けて居る、美人は眉を逆立て勃然として鈴木の傍に行き、「モシ貴君はあまりですよ、昨夕此家へは来れないと仰しやりながら御出になるとは私を踏み付けにした譯ですね、何も私が御嫌なら嫌だと明白に謂うても宜しいでしょう、此様に恥をかゝせるにも及びますまい、いくら禮を知らない日本人でも義理人情位は辨へて御出になるだらうと思つて居ました、エ、口惜しい」と衆人稠座の中で高聲に怨言百出流石の某も茫然として何の事やら語が解らない爲め、唯まご／＼する傍を通り掛つたのは朝比奈知泉氏である渡りに舟と某は「チイ朝比奈……一寸来て呉れ、僕の色女が何だか切りに喋舌るが更に解らない、どうも怒つて居る様だ、君は幾程か佛語か解るだらうから聞いて呉れ給へ」朝比奈氏は充分には

解らぬがどうやら話しの當りはつくだらうと思つて椅子によりつゝ氣を落ち付け、美人の説き出す話を聞けば大概は推し得られた、「チイ鈴木、美人の怒るは無理でない」と半分解りの大意を話すと、鈴木は「ウン左様か僕は金でも請求されるのと思つて實はノ／＼とやらかしたのよ」、朝比奈仲介者となつて漸く美人を手真似やら又は片言でなだめ、風波は收つた處へ現はれたは秋濤、知泉は直らに「秋濤己れも佛語は熟達したぜ今夫婦喧嘩の仲裁をしたよ」と氣煽萬丈、

洋曲一ツトヤ

西洋の諸藝と比較するものうちで、日本の音楽ほど劣等なものはあるまい、到底音楽だけは西洋の音楽の足もとにも及ばないといふとだけは覺悟せねばなるまい、

何の國の人が聞いても日本の音楽だけは實に賞めたくても賞め様がない、實にどれもこれも單調で變化がなく又面白味がない、日本人には音楽の耳はないのだからかなど、極端なる冷評迄も受けるのが度々ある、第一國歌となつて居る君が代の如き歌の主意は格別として、調子の寂しさ聞くものは一種の悲感にうたれる様であるとして評するのだ然るに日本の音楽を聞かない西洋人は日本は美術國であるから、定めて音律樂調の如きも優美で耳を傾ける價值があるに違いないと信じられるには實に當惑するのである或夜某が上流紳士の家で談話會を催すから遊びに來いと招待を受けたから、快諾して其席に列つて見ると、流石は名士の會合だけあつて談話の趣味も津津有味として興が盡きぬ位であつた、其中茶菓は勿論一寸とした酒肴などが出て席が賑はつて來ると、主婦殿が一つ藝盡しをして遊ばふとの提案であるから、一同

手を拍つて賛成した、眞面目くさつて詩歌を詠ずる人もあれば、假聲を遣ふ人もあり諸藝百出滾々として盡きざるうちに彌々某の番になつた、一同は是非日本の歌を唱へとの註文なるが、某生來不器用にて歌一つ唱ふ途を知らず、大に僻易したが此處が勇氣の出どころと腹をすへて座を見廻はしながらエヘンと咳一咳高かに妙な節付をして「ヒート——ツート——ヤ——」と西洋流に或は高く或は低く、ちやく無茶苦茶に我流を極め込んで唱ひ終つたら拍手喝采非常な賞賛を得て面目を施して居ると、座中なる一夫人ツト某の傍に來り、「奇妙な節付で誠に面白う御座いますから、何卒ピアノに合して見たいと思ひます今一度御迷惑ながら……」、サア大變々二度歌へば二度とも節付が違ふ我流の一ツトヤー今一度繰返へせば化の皮は現はれる甘く斷るに若くはなしと、「唯今久振で唱つたものですからどうも喉の工合が

變て御座りますから奥様が御所望とならば近日改めて御宅へ参りまして唱ふ事に致します、と體よく其場を遁れて家へ歸り「二本目は與市も困るとはあれだなア」

### 五人前の料理を一人て

陸軍中佐須磨川氏は爲る事爲す事總て非凡であるとの評判は氏が士官學校に居つた時分から誰しも口にする處だつた、或る時海外留學の命下つて白耳義ブラセル府に滞在中の事である、晩食を或る割烹店にて爲さんと立ち入つて、先づ普通の一人前を持ち來れと命じた處瞬時に食ひ終つて次の一人前を命じたが、これも忽地に退治盡して又一人前くと給仕人の呆れるのにも頓着せず都合五人前と葡萄酒七壇を平げて、「タイ給仕人勘定！」

割烹店主人を初め給仕人一同は驚いたにも、殆ど腰を抜ぬ斗りて、爾來此割烹店へ來る日本人をさへ見れば「貴國の大兵肥滿の中佐殿は豪方ですよ、私等はまだ生れてから那樣な御方は御目にかゝつた事はありません、屹度日本といふ邦は強い邦になりますよ」と常に絶叫してをる、

### グラン、エスト、マー

大久保利武氏佛語練習の爲に巴里へ來り川崎實美、長田秋壽の二人と宿を同ふして語學研究に餘念なかつた、宿亭の主婦此三人を遇する事厚く、注意周到所謂痒い處へ手の届くといふ位であるが、また時には諂諛に過ぎて蒼蠅く感じられるとも度々ある、食事の時には家族一同は勿論此三客も共に卓を同ふして雑談に時を移し、又

或時は諸誠懇をはずす様な事も度々あるのだ、一日晩餐に際し主婦自慢の手料理を爲し客を悦ばしめんとした、然るに案外にも三客は主婦の自ら評する様に珍味とは感じない、寧ろ平日の料理が遙に口に適ふ様に覺へたが、折角の好意を無にする事も出来ず、成るべく勉強して厭やくながら飲み下すのであるが、主婦は更に感じないで、却て客等は遠慮して食べぬと信じ、あらゆる方法辯舌を以て進めたが、川崎長田の二人は語は解るしする故、其の場所を巧妙に切り抜け、先づ無難に厄難を遁れ一息ホットつきたるが、捕虜となつたは大久保氏、語が通ぜぬ爲めに「もう充分」と謂ふ意を通ずるとも出来ず、益々主婦の悪すゝめは激しくなる殆ど立ち場を失ひ進退谷まつたが、此處一番覺へたる佛語を弄する時なりと、兩手を以て胃の處を敲き「主婦クランエストマー〜〜」一坐哄笑流石の主婦も絶倒した、蓋しグ

ランエストマーといふ言は佛語で大きな胃袋と謂ふ意味で、大久保氏は満腹の意味に用ひたのであつた、

### 寢臺より墜落す

「どうも昨夜は大久保君の室が何でも三四度ドスン〜といふ非常な地響がして僕の様な寢坊でも目が覺めた、全體どうしたのだらう、實は飛び起きて尋ねてやらうかと思つたが、音がした斗りで、後は閑りとして仕舞つて能く眠つて居る様子だから見合せたので今朝起きたら聞かうと思つたのさ」と食卓に於て秋濤より朝飯の時切りに昨夜の珍事を喋々して居る處へ入り來つたは大久保氏である、「ヨイ秋濤！昨夜の音を聞いたか」「憚りながら幾ら寢坊でも飛起たさ」「實は面目ないが我輩非常

に寝相が悪く如何程大きな寢臺へ寝ても忽地轉がり落ちる悪い癖がある、此の家の寢臺の如き夫婦子供三人は忽然寝られる素的の大物だけれども矢張僕には駄目だ昨夜墜落すると丁度四度サ」

知らず大久保氏猶今日に至つて寝相悪しきや如何に、

西園寺  
〇〇〇侯飯を炊く

米で育つた日本人は矢張米が戀しくなるのは無理ならぬ話で、三年四年と外國に居るのが永くなると日本食の味を思ひ出し、鰻飯が食べたいの、澤庵で茶漬をサラ／＼やりたいの、など、一種の空想を懐く様になる、七八年前迄は醬油とか酒とかいふものさへも極々稀に歐羅巴へ来る限りてなか／＼に容易に手に入れるといふ

とは六ヶ敷のであつた、従つて日本料理も矢鱈には口にする事が出来ぬのである、或る年、〇〇侯歸朝の途次巴里を過ぎられて一二週間滞在さるゝとになつて、談適日本食の事に及んで座に在るもの一同思はず涎を流す仕末であつたが、某徐に發言して曰「僕の處は臺處もあるしまだ誰も居らない僕きりだから明日一ツ晝飯に日本料理をやらうじやないか」満場など異議あるべき筈がない、侯爵初め賛成された、さて某生は家に歸り翌日の支度に取り掛り、市場へ行つて鯛やら鹽やら夫々の用意をして、翌日は朝から種々奔走はしたが、全料理といふとは勿論、飯を炊くとさへ知らぬ漢だから、物品調つたが之れを調理する道を知らぬ、今に誰れぞ来るに違ひないと待ち構へて居る處へ、一番掛けに來られたは侯爵殿、「オイ飯は炊けたか、なに炊方が解らない、汁も出來ぬ……仕方がないなア僕がこれからやるから手傳ひ給

「と、上衣を脱いで身支度済し、當日の献立は先づあらし成立した時分に押掛たは他の在留日本人等数名、侯爵の手料理とは毫も知らずに「實に甘い、なか〜料理は出来る、頬邊が落ちさうだ、飯の出来様などはすばらしい」などと、賞めそやして舌鼓鳴しての大評判の處へ侯爵は現はれて「敬服たらう、腕前はこの通りだぜ」と種を明かした、一座は始めて侯爵自身の手料理なるに吃驚仰天、手腕の非凡なるに恐入つてぞ見えにける、

糞溜へ頭を投ず

巴里遊學中一夕黒田清輝氏、長田秋濤を捉へて多年研究せる靈魂不死の名論卓説を擲ぎ出し喋々すると凡そ數時間、眼を耐へて耳傾け居れる秋濤も終に避易して、他

事にかこつけ漸くの事て其の苦難を遁れるを得たが、是非復讐せねばならぬといふ念は止まなかつたのであつた、之れより數日晚餐の後兩人は、暖爐を圍んで雑話に餘念なかつたが、秋濤不圖思ひ出せるは、此時なり機逸すべからずといふ積りで、今度秋濤が多年熟讀せる古今和歌集の講義を始め出して、何時止めるといふ様子も見えない、前に清輝氏は秋濤をして自論を謹聽せしめた義理合て中止を命ずる譯にも行かない、餘儀なく苦しみを耐へて、傍らなるラム酒をクビリ〜と飲んでしまぎらしながら、漸く終結まで我慢をした、秋濤は清輝氏が餘程ひるんだ様を見て心中大満足で、久米桂一郎氏と何か用事があつたと見へて外出した、凡そ二三時間も経つた頃ほひ、久米氏と秋濤は歸つて來たが清輝氏の影が見えないから「久米君奴もとう〜降参して、何處かへ遁走したワイ」と話し合ふうち、

何の氣もつかず久米氏は雪隠に入ると、一個の黒き物が腰掛に兩脇を載せて俯きながら、雪隠の穴へ頭を投げ込み唸つてをる。「オイ秋濤誰れか雪隠に倒れて居る、早く燈を持つて来い」と叫んだから、秋濤は手燭を携へ走り行き、久米氏と兩人して撿すれば、黒田である、兩人は一驚して「チイ黒田、どうした、息はあるか」「ウーン」なんだ其様は、病氣か「ウーン」「チイ返事をしないか」と揺り起せば清輝氏は悄然と頭を掻けながら、「實は秋濤の講釋を聴くがづらさに、ラムを飲みながら氣をまぎらせたが爲め、遂々多量に飲んで苦しくつて堪らないのだ、アムモニアを嗅ぐと酔が覺めるといふから、此穴へ頭を突込んで今思ふ存分嗅いで居る處だ、死にはせぬから安心しろ、

牛糞を嘗む

巴里に三人の奇人があつた、風采などには毫も頓着せず、常に在留日本人中の色變りを以て目されて居た、或日朝かなる春晴に乘じ、三人相携へて巴里郊外。散策を試みた、途中も三人の事であるから奇行を演じながら、楽しく、面白く、サンクルといふ處までぶら／＼逍遙て来て、公園の一茶亭に腰打掛け、小憩して居るうち、適く一人の目に入つたのは山の如く堆める新しき牛糞である、△「チイ〇〇、君は能くなんでも平氣な男じゃが、まさか此の牛糞を指の頭に付けて味ふ勇氣はあるさ」△「誰れが其様馬鹿な事をするものか、然し物は相談で、斷然貴様の提案を排斥するといふ譯でもなし」△「何に相談つくなら牛の糞をベロリとやるといふのか、

馬鹿を謂へ、幾等貴様でも夫れは出来ない」「出来ぬといへば屹度行つて見せる然  
 したいては御免だ」△「〇〇が行るなら俺は一法出す」「あれも一法出す」「〇〇合計  
 二法じゃ駄目だ、其様廉い賃金では御免を蒙らう、どうだ合計五法なら……」  
 △「〇〇五法やる屹度嘗るか」「〇〇當然よ」と流石は人目を恥ぢてか、四方を眺め人の  
 居らぬを見定めて、牛の糞の傍へ立ちより、小指を其中に突き込み、忽ち唇邊に當  
 てし、ペルリッ、終に五法は〇〇の獲る處となり、△「〇〇は呆然として感嘆の聲までが  
 「フーン」

晚餐料二百法 (凡八十圓)

○醫學博士獨逸に留學する凡一少年、歸途佛都巴里を見物せんとして一週間斗りの豫

定て立寄つた、適々伯林より某氏の許に來狀があつて、〇は甚吝嗇の人物である故、  
 今度貴兄を頼つて巴里見物に行くに付ては充分油を絞つて向後のみせしめとすべし  
 云々との教唆狀が舞込んだ、果せるかな、〇氏は舊知識でもある某の許に來り東道  
 の主人たらんことを依頼したから、某も快諾して、夫れより日々〇氏を伴ひ病院  
 だの學校だの、随分注意して案内の勞を執つて遣つたが、〇氏は一言の禮も謂はぬ  
 を某は片腹痛く感じて、是非出發前に一泡吹してやらんと期して居つた、或る晩の  
 事、〇氏は某氏に向ひ「君、佛蘭西の料理は世界に冠たると云ふ噂であるが僕も巴  
 里へ來た思出に一度味つて見度いものだ、僕が御馳走するから第一等の割烹店へ案  
 内して呉れないか」との懇切なる望故、某氏も承諾して、直ちにデユリーといふ家  
 へ至り、山海の珍味を取寄せて食べさせた、最後に覆盆子があるといふとが書いて



あるから某は○氏に向ひ「未だ冬の半ではあるが、君此の家に覆盆子がある。食べ  
るなら命じようか」覆盆子「僕は好物だ、勿論食べようじゃないか」との返答に  
某は志すまじたりと給仕人に覆盆子を命ずると、時節柄ではあるし、小さな土で作  
た瓶の中によつと五ツ六ツ宛外入れてないのを持ち來たのを見て○氏は忿然として  
「タイ君、之れでは食べた心持がしないから、澤山持つて來いと命じて呉れ給へ」  
と日頃の吝嗇に似合ぬ鷹揚なるに、某は一驚を喫したが、また胸のうちで、斯様時  
に懲す外策はないと考へ、給仕人に山ほど持ち來るとを命じた、○氏は食へるく  
氣のひける程食べ終つて、「タイ君もう僕は澤山じゃ、そろ／＼勘定して出掛ようじ  
やないか、書付を取つて呉れ給へ」某は机を拍ちて勘定書を取寄せ、知らぬ顔して  
○氏の前に差出せば總計二百何法、○氏は仰天して「此様に高いものと知つたら、

我慢して食べなかつたものを」と後で死兒の年を數へるも同様、

### 汽車中の大便

某樞密顧問官、其友人と西都マドリッドより巴里に向ふ汽車中で、突然便通を催ほ  
して耐へる能はざる迄に及んだ、テ一策を案じ車中に齎したる日本の新聞紙を取り  
出し帽子の中へ十數枚重ねて敷き、車中の旅客等の眠れるを機として、思ふ存分  
用を済まし、これを車窓から外へ放擲すると、間もなく汽車は停車場へ着いて、退車  
せねばならぬ事になつた、臭氣を堪へて友人が此の光景を眠りながら、密に眺めて  
居たとも知らずに某は、「君どうも歐羅巴へ來ては、日本の新聞紙は困るね」と語る  
に友人は心中笑いながら「さうさ、元來糞をするためにこしらへた新聞ではないから

「な、某愕然、」やア見て居たな獲しま〜」

### 佛人は日本語が話せる

吉田次郎氏(元倫敦領事)歐羅巴の某國へ駐劄を命ぜられ、赴任の途次馬耳塞に上陸してクランドホテルに投宿した、久振りにて浴を試み海上の垢と潮氣とを洗ひ落さうとして僕に其用意を命じた、間もなく準備整ひたるを僕は告げに來たから、石鹼を請求しようとしたが佛語にて何と謂ふや更に解らない、種々なる手眞似はなして説明すれども、愚鈍なる僕の事故毫も理解する様子がない、瘡癥玉は破裂し、日本語で「己れの言ふ事が解らないのか、唐變木め!、シヤボンを寄こせといふのだシヤボんだぞ〜」と腹立ちまぎれに罵れば、僕は梵爾としてウイ〜と首肯して

立去つたが直に石鹼一個を携へて來た、吉田氏は思はず「やア此奴は感心だ日本語が話せるなア」蓋しシヤボンなる語は佛蘭西語のサボンの變化したものであるを、

### 便器函中の黄金佛

船室の寢臺の傍には必ず便器函が用意してあるものだ、京都の織物商川島某は、大の信佛家にて何處へ旅行するにも、常に懷中に秘藏の黄金佛を藏め、宿泊する度に枕頭に安置して其身の安寧を祈るといふとが習慣になつて居る、數年前川島氏歐米漫遊の企を起して、神戸より佛國郵船に搭じて馬耳塞に向ふとになつた、同行者は某公使初め凡十數名であるから船中には日々日本村が出來て、海上風波の穩なる時は

中々賑やかである、瀬戸内を通つて玄海灘にかゝる頃から、追々船も揺れ出して川島氏も終に船室の寢室に横臥する一人となつた、一行中に某なるものがある、度々の航海に船にも慣れて居るが爲め、獨り一行慰藉の任を帯びて、適々川島氏の船室を訪れると氏は非常に悦で「私は船が嫌ひで實に弱りさります、夫れに西洋ものが餘り好物で御座りませぬ故、日本を出る時分に金米糖を用意して参りました」と謂ひながら寢臺の下から敬しく陶製の便器中に、金米糖を入れて差出されしかば、流石の某氏も呆れかへつて暫し呆然としたが謂はぬ譯にも行かず「川島さん失禮ですが、これは小便をする器ですぜ」と注意されて同氏は吃驚「これは大變なことをしました私は菓子入だと思ふて……、デハこの大切の金米糖も捨てねばなりませぬね」と起き上りつゝ、また手も付かぬ金米糖に訣別の意を表しつゝ、船窓より海

中へドーン

然るに今一つの奇談は、川島氏が黄金佛をば、便器國とは知らずに緋縮緬の布團を三枚重ねて香爐などを飾り函の奥の方へ恭々しく安置して居たのであるから、今友人が便器國といふ話を聞いて甚しく驚き勿躰ないとをしたらとて、夫れより兩三日の間は齋戒沐浴して不明の罪を黄金佛に謝したといふとである、

虚飾紳士

虚飾といふとは世の中に立ち、且世の中を渡るに必要なものだらうか、當時ハイカラと呼ばれる輩を見るに、多くは虚飾でないものはないようだ、表には善行を説きながら、裏では待合の女將を我物としたり、極内々て不見轉藝妓を轉ばして見た

りして明白に行へば左程目に立ぬ事を無暗に秘密ごとく行すから、人にあはかれた時分には夫れが非常に評判となるのだ、夫故寧ろ爲る位なら公明正大にズイ〜と行るまでの事だのに、當世ハイカラ黨の輩は、種々なる事がどし〜尻から破れるとも知らずして所謂掩耳偷鈴の忍を爲すものが、殆ど皆であるといふを斷言するに憚らない、天地に踞踏して惡事醜行をコン〜演ずる様なら、度胸を入れ換へて眞正の君子になり給へ眞正の君子になるほど悦しい、事はないじやないか、と忠言めきたる事を止めて、茲に某ハイカラが、演出した一奇談を記るさうに、

歐羅巴からの歸り途の事である、新嘉坡へ着く頃ほい、一人の日本人某が同行者なる一ハイカラ先生に向ひ、「君は勿論上陸するだらうね、一處にマラヤ街でも見物しようじやないか」とむきだしに誘導すると、ハイカラ先生襟を正して、「全躰君は怪

しからぬ事を謂ふね、マラヤ街は日本醜業婦の陳列場であるじやないか、苟も紳士たるべきものが足を入る處ではないのです、況や白晝那樣處へ參られましたようか考へて御覽なさい、私は新嘉坡の當時の状況を充分視察せねばなりませんから先づ領事館や三井等を訪ふ積りです、君は何分穢き姿である故、御同伴は御免を蒙りますよう」と鹿爪らしく仁義道德の道でも講しさうな鹽梅に人を撥斥するから、其日本人は胸中で思つた、奴郎獨りでコン〜マラヤ街へ出掛るに違ひない、奴の多淫多情で此の新嘉坡へ來て、マラヤ街を素通りするやが出来るものか、今に奴を三拜九拜さしてやるぞ」と、獨りうなづきつゝ、其時は至極單純に「アー左様か」と謂つて別れてしまつた、

船は間もなく新嘉坡の埠頭に到着した、第一番に駈け上つて行くはハイカラ先生で

ある、某は彼の飛乗る馬車へ目標を付けて置いて、悠然上陸して後から車を命じマラヤ街へと鞭を揚げさせた、果せるかな一輛の馬車は一娼樓の戸前に待ちつゝあつたから己の車を停めて、彼の馭者に「貴様は日本人を波止場から連れて来たらう、今此家に居るか」と問へば、何事も知らぬ馭者の事故、「先刻から此家に御出になりました」の返事である、某はしめたて手を拍ち獨り悦びつゝ、直ちに家に入ると、主婦らしき者現はれて「御連様は二階の坐敷に」と、問ひもせぬにハイカラの居間を教ゆる仕合、計は熟せりと蕩然二階へ走せ上り指し示された室の戸を敲くと、早や階上のハイカラは階下との話し聲を聞き姿を見せてはならぬと、慌てゝ居る處であつた、某が餘りに激しく敲くが爲め相手の娼妓も黙つては居られず「唯今明けますよ〜」と答へながら戸を開ると、居たと思ふハイカラが居らぬに驚いた某、

さては何處にか隠れたであらうと、不圖寢台の下を見れば居たりや〜、然も赤裸なる一疋の動物が息をこらして居る、某は猶此上追窮するも可哀想だと思ひ、態としらぬ顔して「居らないのか」と一言残しつゝ、直ちに馬車を駈つて領事館へ行つて、凡數十分間の後ハイカラは來り「ヤア少々取調の爲め處々方々を奔走して、取調とは果して何の取調か、總ての秘密を發れながら、猶恬然として何處までも口を拭ひ居る厚顔には流石の某も唯驚くの外なかつた、

令嬢の激怒

印度洋上風清く月明なるの夜、船客は打寄つて無聊を慰めんが爲に、種々なる遊戯を演ずるのだ、或時某令嬢の發案で、男と女を區別し、各當て物をする、女が負

ければ當てた男が女に接吻する権利を有する。男が負れば女が頬邊を鼓く権利を有するといふ様に、概略の規則を設けて面白可笑しく演じ始めた、

遇々一人の厚顔極まる一紳士が其仲間に居つた、充分佛語も解らぬ僻に女が雜つて居る遊びなら、恥をかゝされても何ても仲間入をしようといふ淺草公園の狒々然たる一珍物である、其日も解りもせぬに是非仲間に入るといふから断はる譯にも行かず、一同承諾して見は見たが、兎角頓馬の事斗り演じて邪魔になる爲め、皆から蛇蝎されて除物同様に取扱れて居る、とは知らぬが佛、意氣揚々として早く令嬢達の頬邊を嘗めてやらうといふ、助兵衛野心満々として待ち構へて居た、彌々遊は興に入り、男女とも夢中になつて騒ぎ居る最中に、如何思ひ違へたか、未だ勝負も判然せぬのに、紳士は坐中の花と目されたる一令嬢の首につかまり、突然接吻の強制執

行をしたから、令嬢は驚くと同時に非常に怒つた、令嬢のみでなく一同は餘りの狂態を苦々しく思ひ、爾來誰一人此紳士を相手にするものが無くなつた、人は謙讓の徳こそ必要なのである、夫を辨へずに我慾斗り充さうとすると、未は強い目に逢つて社會から爪はじきさるゝ様になるものだテ、

冷罵宣教師を走らす

毎歳八月は佛國から東洋へ宣教師を派遣する時節で、此時分の東洋行郵船には、毎回少くとも三四十人の宣教師が搭載されて、暹羅、安南、雲南などを初め、遠くは青江を溯つて西藏近くまで進むのである、彼れ等は僅に月十五六圓の手當で、之れを以て一切を賄ひ、且つ貧民救助もせねばならぬのであるから、文明國の物價の

高き所に行くを悦ばないで、寧ろ野蠻地の生活の庵末な地方へ派遣せらるゝを冀望するのだ、夫れ故日本は尤も宣教師には禁物とされてあるさうだ、加之日本人民は他の人民に比すると、宗教上の觀念が薄く布教が困難であるといふとを常に歎いて居る、

去る歳磯野某が歸朝の途に上るや、恰も八月頃であつから宣教師を以て船中は賑つて居たが、然し何處となく、僧侶の道連といふものは陰氣な者で、陽氣な航海をするとは覺束ない、のみならず磯野氏は資性豪放で宗教等の事は眼中に置かない方であるが同船をした縁故で、僧侶の三四人とは餘儀なく次第に懇意になつた、其僧侶の中に年配二十四五の若僧があつて大坂に派遣せらるゝのだといふて、切りに磯野氏に日本の状況などを質し、時には磯野氏が宣教師の前をも憚らず、と恣まゝに蕪

雑の言語を弄したりするを矯正しようなどいふ風であるから、磯野氏は心中何日か彼れ等の肝玉を冷やしくれんと考へた、一日日本派遣の若僧は、同輩四五と連だつて磯野氏の傍に來り加特力教の有難味を説きつゝ、切りに磯野氏を導うとすれど氏は嘯いて應ずる氣色なく、時々「坊さん達は何故婚禮が出來ません、我々は地球を無窮に維持する大任を帯て居るから生殖上の權は天賦のものだと思ひます、夫に其の大責任を全ふしない様では人間として生てをる甲斐はないではないか」などと途方もなき横鎗を喰しては傲然たる故、若僧等も持てあまし、今度は彼方が腰を低うして日本に於る布教の手段を問ふた、磯野氏は眞面目に「さうですな、日本には藝妓といふものがあります、貴方達は御存じてしよう」僧「話しに聞て居ります」夫れなら日本へ御出になつたら先づ藝妓買ひをなさい、藝妓といふものは先

づ一番籠絡するに六ヶ敷いもので、これを人情づくめに掌中に翻弄し得れば、他の人民位容易に我意の如く爲さしむるを得るのです、夫れに大坂は藝妓の本場と来て居るから、第一等の藝妓を耶蘇信者になし、此藝者をして通人粹客を説かしめたなら必ず信者は澤山になりますよ、無暗に僧侶だ宣教師だからと謂て道徳呼はりをするものだから中々布教は困難なのです、藝妓買いだつて仁義の道です、支那人の謂ふた事に博く愛する之れを仁と謂ひ、行ふて宜しき之れを義といふとがあるのです、藝妓だから濟度しない、素人だから濟度するは教の道に背いて居るじゃありませんか、何しろ導くに難きものから手を付て御覽なさい、後は容易く行れますぜ、何も方便でさア、アーメン〜と謂た斗りでは人情の極微は解りはせんよ」ど氣焔萬丈、流石の宣教師等一言もない、唯喋り倒されて不平〜で堪へられず、爾來

磯野氏を呼で東洋の鬼々と罵るを片腹痛く思ひ、ホルトサイドへ着くや否や、同地名物の春書數葉を買ひ求め之れを状袋に封じて、「船中の無聊御察し申す、之れを見て益す悟道を得給へ」と、贈つた宣教師は其何たるを知らずして欣然之れを領收し開封一番「又悪戯をしやがつた！」

### 西洋人は贅澤だ

西洋の理髪店位贅澤なものはない、先づ大鏡の十や十五は備へ付け天鷲張りの椅子を初めとし化粧上必要の香水香油は勿論器具に至るまで網羅し盡して剩す處ない、夫故日本からなど行くと先づ理髪店の壯美なものに驚くのである、

「テイ君！僕は巴里へ来て驚いたのは理髪店の立派などは勿論だが、理髪手の容貌



が紳士以上であるには一層驚たね、夫れにこゝに一つ東洋から来た我輩を啞然たらしめたのは、ソラ一垧十圓とか十二圓とかいふシヤンパンといふ銘酒で頭を洗ふのサ」と、新來の一日日本人が永年遊學する某に眞面目に話すと、某は失笑して「何を君は謂ふのだ、理髮店、理髮手の立派に驚いた迄は宜しいが、シヤンパン酒で頭を洗ふた？、其様馬鹿な事があるものか、シヤンパン酒の様な甘い酒で洗つて見給へ、君の頭は大變だ、寝惚け給ふな」と嘲れば新來先生は、一生懸命に、「デモ、シヤンパンで洗つたから洗つたと謂ふのだ。嘘と思ふなら僕と一處に理髮店へ来て問ふて見給へ」と確く信じて動かないから、某も少し疑ひつゝ、「シヤンパン〜……」と暫く考へて居たが、忽地膝を叩いて「君シヤンパンじやあるまい、シヤンブリアンの事だらう、それはシヤンパン酒ではないよ、シヤンブリアンは石鹼の水で善

く理髮店で用ゐるものさ、君は夫れを間違へて感心して居るに違ひない、洗ふと泡沫が澤山出るだらう、而して好い香がする、どうだ僕の鑑定は」と、新來先生初めてシヤンパンとシヤンブリアンの差異を知り頭を撫てつゝ「左様かも知れないね、」

### 雪隠での挨拶

當時某國に駐劄する公使〇〇〇、一書記生として英國に在勤中の事である、或る家に寓して居つたが、主人は二三ヶ月前より旅行して不在であつた、或る朝雪隠に入り戸を鍵で閉るのを忘れ「悠然腰打掛けて用を達し居つた處へ、昨夕歸りし此家の主人〇〇氏の居るとも知らずに雪隠の戸が開け放してある爲誰も居らぬと、信じてニューット入り來り、思はず顔を見合せたから〇〇氏も吃驚り主人も仰天、立ち場

を失つて主人も知らぬ顔にて去る譯にも行かず、餘儀なく〇〇氏の傍に來り「頓だ  
處で嗅い御挨拶を致します、永らく留守に致しまして………」と寒暑の見舞や  
ら何やら互に苦笑しつゝ分れたといふ、

### 黒奴の面の憎さ

熱帯地方の諸港の土人は兎角奸悪であつて、較もすると盜坊詐欺などをし、又旅慣  
れぬ旅人を見ると、強迫などして金を取るとか度々あるから、餘程注意せぬと馬鹿  
な目に逢ふのである、之れ等の尤も甚しい處は香港、格倫、亞丁などであつて、總  
て船着きの悪い場所に悪事を働くものが多い様だ、  
格倫の波止場から數十町沖に碇泊した船に歸らんとして、丸木舟を雇つて飛乗つた

日本の一紳士がある、漕手は年頃な黒奴三人斗りて、日本紳士と見たから、親船近  
くなる頃になつて賃錢を増せと謂ひだした、紳士は既に四五度も此邊を通過して、  
幾度もなく如斯き奸手段を食つて居るから更に意に介しない、唯彼が謂ふまゝに、  
容易く承諾したから、黒奴等は與し安き日本紳士と思つて、馬鹿にしぬいて本船ま  
で漕ぎ寄せて、「サア賃金を、約束通りに、紳士は諾きつゝ、宜しい屹度與るよ早く  
船を着けんか」と、軽く言放つた、黒奴等は紳士の胸に一物あるとも氣付かず、無  
造作に本船の昇降口にベクリと船をやると、紳士は醜然と本船に飛乗つて、急に船  
の僕を呼び、彼奴等は不届だ、己れを通常一般の旅慣れぬ紳士と思ひ、例の沖中で  
人を強迫しようとしたから、罰に一女も與へずに追拂へ」と、命じたとも知らずに  
一人の黒奴は、ノックと上つて來たのを、僕は待ち受け、突然杖を取つて脊中を

二三擊腕の痺れる程打つた、此の音を聞きつけて集つて來た他の僕どもは、各々手に棒を携えて思ふ存分に、辛き目を見せやらんと追つ取り圍いての大懲罰、漸く黒奴は一條の血路を得て甲板の欄干へ飛び乗ると同時に、ドブんと水烟を立て、海中に跳り入つた、紳士初め僕等は、善い氣味なりと手を拍つて黒奴の浮ひ出る處を伺へば、凡そ一二町も遙かな處へ、突然首を出して此方に向きつゝ、「ベツカツコ——」其の憎らしき様子は今に至る迄目に殘て居る、  
 初めて洋行の紳士などは、香港以西は餘程注意しないと、酷い目に逢ふから御注意々々、

### 湯屋は何處か

英語ほど音詞の六ヶ敷い語はない、唯僅に一音の出し方の違ひで更に此方の意を通ずるとが出来ぬ様になる、

某博士龍動に至り、浴を欲して家婢に湯屋の所在を訪ふた、(英語では湯屋の事をベイスといふ)、然るに家婢は更に博士の謂ふ語を解しなす、一家一同擧つて切りに耳を立て、聞くが、博士の謂ふ處を判断する事が出来ない、ベイスと謂へば龍動人は乗合馬車の事を、ベイスと簡單に云ふともあるから一同は乗合馬車ならんなどと考へて、夫れを指示するなど到底博士は駄目と考へ、家を飛び出し途上の人に問ふけれども、是亦更に解る氣色がない、適一老翁が來たから鄭寧に問ふたが矢張以前と同様だ、餘儀なく手眞似を以て、頭から水を被る事をした處、老人は手を拍ち、「解つた——一處に來い」といふから後に從つて行くと、豈圖んや辻雪隠——、成る程

水が上の方から流れ落ちて居る。これではないと今度は老翁に向ひ 体を洗ひ落す姿  
 やら、湯に入る有様を演じて見せた、漸う老翁は真意のある處を解つたと見へ、「君  
 よ、君は切りに先程よりパツス、くくとペの字を短く發音する故、誰も解らぬじや、  
 浴は即パ——スとペの字を長く延して發音すれば能く解る、以後注意をせぬと強い  
 目に逢いますぞ」と、懇切なる教訓に漸く入浴するを得たといふ、

### 貴夫人の寢室へ飛込む

書記官某(巴里在勤)或る晩友人の處で強く酩酊し漸く馬車に乘せられて、假寓な  
 る旅館に送り歸された、某の室は三階であつたが、二階には英國より巴里見物に遊  
 びに来た、一貴夫人が投宿して居た、某は馬車を降り、醉眼朦朧、步調蹣跚、杖に

寄りつゝ階段を上り、己れが室に歸へらふとした、尤も其の夜も早十二時過である  
 から瓦斯も消へて僅に夜灯が、一ツ薄暗く照して居るのみである、某は何の氣も  
 なく様子知つたる我室の事故、戸を開けてゾト室に入り、手暗がりにて衣服を脱  
 して、寢臺に上らんと足を掛けると、突然一夫人が絶叫した、某は腰を抜さん斗り  
 に驚き、殆ど裸体の儘、こは誤つた階段を取違へて他人の室に入りしに違いないと、  
 急いで脱ぎ捨たる衣服を小側に抱へ、韋駄天走りに我室へ駆け込み、知ぬ顔しつゝ  
 眠りし風を装ひ居れば、二階なる貴夫人室にては大騒動の様子何卒無事落着をど心  
 の中で念じてをると、階段を人の上り來る様子である、さては露現に及んだかと、  
 息を耐へて毛布に頭を隠し居る處へ、旅館の主人は戸を敲ひて入つて來た、「貴方何  
 うなさつたのです、夜中男子が貴夫人の室に入るなどは怪しからぬ次第、筋道の

立ぬ以上は私方の商賈にも關りませんから直様御引移りを願ひます」と、苦り切つての挨拶に、某は自分ならずと言遁しようとするれど、主人が携ふる絹帽子は正しく我物、まして裏には名前が記してある次第、隠す譯にも行かず、實は斯くくの次第だと、頭を掻きつゝ事情を打明れば、主人も漸く怒りが解けて、左様な譯なら私しより宜しき様に、貴夫人へ御挨拶を申上ますとの語に、某は唯々平身して御頼み申すくど、冷汗流しながら、手を合せて主人を拜んだ姿は、定めて可笑かつたらうと、後て此物語を聞く人は皆々話し合つた事だつた、階段を間違つて能く失策をするは洋行中の出来事故、餘程謹しまないといけませんよとは、著者が老婆心ながら……

栗で腹を肥すと三日

漢學塾に居つては腐つた魚を食はせたとて下女を暗撃にする、寄宿舎に入つては、下等米を食はせたと怒つて、忽ち地附征伐を企てる、年が年中、ピークツク、財寶に一文なしの一書生、唯意地の強いので、どうやら世の中を押し渡つて、十八の時外國へ留學を命ぜられて巴里へは來たものゝ、何日もかはらぬ素寒貧、學費を受取れば直に右から左へ遣ひ盡して、一二月は食ふや食はずの大苦難、然し毎度の事として、左程迄には感じもせず、無ければ無いで平氣の平左、何處を風が吹くかと思はし込む勇氣は、慥に吾黨以外にはあるまいと思はれた、或年の暮三ヶ月分の學費は、役所から一纏として送つて來たが最後、あらゆる榮耀榮華を盡して、殆ど一

夜のうちに獲の底をばたいて仕舞つた、さて左様いふ牀になれば、どうやら工風もつく筈であるのに、其歳の暮に掛つては運悪く鏝一文も出来る見込はなく、同居せる三人の若者は。ストーブに燃く石炭は勿論の事、食事をする金もなく、一時は途方に暮れはてたが、貧乏には習慣性のある輩とて、困た色は顔に出さぬ強性者の寄合ひ、甲「チイどうする腹がすいたじゃないか」乙「どうするもこうするもあるものか我慢する斗りよ」丙「見當てのある我慢なら随分遣り通はしもするが、何日になつたら御飯が食べられる様になるのか少々心細いなア」乙「そふ謂へば、己れもそろ／＼腹の虫がグウ／＼謂つて來た困つたなア」甲「我慢、忍耐………」と呑氣には嘯けども千松ならぬ奴郎ども、如何しようかと各々多少當惑はしたが、其中の一人ツト机の抽斗を驗べて「ヤ！三法ある、これで何か腹にたまる物を食べよ

う」との説を出して協議の結果路傍の焼栗を買ふとになり、漸く三日間は籠城した  
が腹には溜る溜飲は起る、もう落城といふ處へ、仁人君子が駆け付けて漸どの事救助  
船を得て、稍々人間らしい食物にありついたは、矢張巴里留學の三奇人である

### 町角でズドーン

某皇族の家令某或日學校に行く時刻が遅れた爲め、駆け足で走つて行くと、或る町  
の角へ突然現はれ出たは一個の夫人、此方は必死の速力であるから急に止まらない  
で「アイツ」と云ふ間に、ズドーンと其夫人にぶつかつた、夫人は衝突して敷石の  
上に美事に轉んで仕舞ふ、家令は謝りを述べて居ては時刻が遅れる、且つは面目が  
ないと、後ろも向ずに矢の如く走つて形を隠したのを、通り掛つた友人が見て、後

て彼奴を充分懲さんと思ひ、先づ夫人を扶け起して、切りに手當をしたが、幸に傷も出来ずに、唯「日本人の無禮者く」と罵りながら立去つた、翌日友人は家令を捕へて其の不法法を語り大に將來を戒めたので、家令は平目のやうになつて謝つたといふ、

裸躰の角闘

歐羅巴の大都と言はれる所は、殆ど淫賣婦を以て満されて居ると言つても過言ではあるまい、其勢力たるや、ナカク凄まじいもので白晝駟馬に鞭つて、綾羅錦繡を纏ひ、公園を散歩して榮耀榮華を極むる者もあれば、又膝栗毛を極込んで粹客の一顧を求むる者もある、大厦高樓に住んで酒池肉林の中に夢を貪るものあれば、裏店

如き家に住んで、麵麩チイスに其日を凌ぐやうな安地獄もある、先づ地獄は巴里、之に續いて倫敦、伯林、維也、羅馬、到る所、都の飾物となつて居るのである、それ故随分警察も非常に注意をし、過ちのないやうに、ソレ／＼豫防手段を執つては居るけれども、時には奸悪なる手段を以て、外國人などを辛い目に遭はせることがある、某評定官、某侯に従つて巴里に遊び、一夕の春夢を食ばらうとして、某大街の一青樓に登つた、雲の如く群り来る賣淫婦の中に目に着たるは芳紀十八九の美人、セーヌの水で洗ひ上げた美麗さ、巴里美人の標本とは是かと思ふばかりの女性、東洋くんだりより花の都に來た評定官は、睚を下げ恍惚として居ると、夫れを早くも見て取つたは其淫賣婦、

流石に眼が高い、是れぞ鼻下長の一人ならむと的を付けて、ツカ／＼と評定官の傍に寄り、女「何うです妾と一緒に御遊びになりませんか」と、佛語で話し掛けては見たが更に通じない、其淫賣婦多少英語も能くする者と見えて、今度は英語で話し掛けた、

評定官は亞米利加には、長く留學した人であるから忽ち、其意を解して、應來を極めたのである、そら「シヤンパン」、そら「コギヤツク」それから「アイスクリーム」と、あらゆる飲食を仕盡して、夜も更ける頃ほひ、馬車に打乗り此女の家を誘れ行かれた、

處が此女の部屋に入つたときから、何處となく彼の様子がソワ／＼しく、評定官の腑に落兼る所が見えるのである、が併し是から先き一大事變が起るとも氣が付か

ず、女の言ふが儘に衣服を更へ、將に眠に着かうとする刹那、男の足音がして頻に戸を叩く者がある、女は態と恐怖の様子をして、顔色を變へ、周章狼狽したる有様であつたが、益々戸を激しく叩くゆゑ、餘儀なき風で女は戸を開くと、

入來つたは雲突く計の大男、面貌は何う見ても劣等人種、獐猛なる相恰をして、突然評定官の傍に來て「貴様は何だ、俺の家へ案内もなく勝手次第に這入つて來るばかりでなく、女房の部屋へ俺の許しも受けずに來て、着物まで脱ぐと云ふのは、扱は貴様は間男か、唯は置かぬぞ、サア何うする」と、今にも暴れ出さむとする様子、

此處に至つて評定官を悟つた、是が歐羅巴の美人局であつたに違ひない、或は此女と話合つて我が所持する、金錢時計等を奪取らうと云ふ計畧と云ふことを推し、



遅れを取つては、益々彼れをして増長せしむる基だと腹を据へて、裸躰の儘突然傍なる椅子を取つて彼れに向はうとした所、此大男は徐に懐中からピストルを出して一發放たうと云ふ態度を執つた、彈丸が込めてあるかないかは知らないけれども何しろ飛道具を持たれては、闘ふ勇氣は挫け、三十六計逃るに若かず、斯の如き淫賣家に於て、某侯附従の某評定官が、殺されたなどと云ふことになつては、身分は勿論國家の大耻辱、無念を堪えて引退くに若くはないと思つて、立去らうとはしたが何を言ふにも赤裸躰、如何はせんと躊躇うにも拘はらず、大男は頸筋を捕へて「サア出て往け、異議に及はぬ打殺すぞ」と、益々脅迫をする、怖氣か附いては瞬間も居られたものでない、大男の爲るが儘に、門口に突出されて、後はバタリと戸を閉められた、

悄然と其家を出ては見たが、前の始末で衣服がない、賑かな巴里の街を此躰裁て歩いた日には、益々評判が高くなる、詮方なく瓦斯燈の影暗き所に佇立んで、辻馬車の通るのを待つて居ると、恰も眠さうに馭者が鞭を振りつゝ來るのに出遭つた故、其車へ飛乗つて、どうやら家に歸り翌朝之を懇意な者に話すと、并は捨て措かれぬ問題である、極く内密に警察へ届けるが宜からうと云ふ忠告であるから、其家と番地を確かめむと思つて、評定官は再び其街へ赴いたところ、人も知る通り家屋の制度が一定して居るが故に、土地不慣なる東洋人にはどの家を見ても同じやうな構造、殊に一軒の家に二十人も三十人も住む階段制度ゆへ、到底自分が斯の如き醜い目に遭ひながら其賣淫家を知る能はずして泣寝入になつたと云ふ大失策、抑此評定官といッば諸君が御存知の……ホイ天機洩らすべからず!

## 小便の馳走

黒田清輝が、グレーと云ふ巴里の田舎に退込んで、揮毫に餘念なき時分であつた、之を訪問したのは久米桂一と長田秋濤、兄弟も同様な間柄ゆる朝から四方山の話をし折しも夏のことであつたから、小川に出て釣を垂れ、或は緑林深き所のハンモツクに眠つて、思ふ存分遊んだ揚句、此グレーの街外れなる一旗亭に登つて晚餐を一緒にした、

旗亭の主人は吾々を東洋人と思つたか、甚だ冷遇するのみならず、此處に来て居る客共は頻りに此方を見て、冷罵嘲笑を恣まゝにするので、短氣な秋濤黙つては居られず、何か彼の客共に辛き目を見せて遣らうと、腹の中で思つて居ると

食事も済むで、愈々珈琲を飲む時分になつたからブランデーを命じた、各々一杯宛を試みたが水六分フランデー四分の甚だ不味い飲料である、秋濤「オイ黒田、イクラ人を馬鹿にするつたつて、斯んな物を飲ませる奴があるものか」、黒田「でも此邊の奴は皆之を以て満足して居るんだ俺達に飲ませるばかりでなく、皆彼の客共も之を飲むんだぜ」、秋濤「ウム左様か」と言つて何事か胸中に案じ出したものと見え、ニヤリと笑つたが、忽ち手に取つたは、其ブランデーの壺、秋濤は四方を見廻しながら、脊中を客の方に向けて、それを隣間に挿むだ、さうして放尿數行、知らぬ顔に元の所へ置き直した、黒田「酷いことをするな、餘り可哀想だぜ」、秋濤「ナニ構ふものか」、果せる哉、給仕人は、彼方の客がブランデーを要するからと言つて、其壺を持去つた、秋濤「びた／＼、ソラ徐ろ／＼芝居が始まる、能く見て居ろ」と、言ひ終らぬ中

に、黒田は机を叩いて、「飲むく飲むはく、」秋濤平然として、「ザアを見やがれ……」

### 十九世紀の末路じやないか

パリに夏中大流行する遊戯場がある、氷宮と名けて其結構、規模の壯大美麗なるは、唯々人をして嘖然たらしむる斗りなのだ、見世物としては演戲もあれば輕業もあり、唱歌もあれば舞踏もある、其他氷滑の場所なども、あつて三伏の暑を頓に忘却せしむる仕掛になつて居る、或夜藤侯、知泉、秋濤を伴ふて塲裏を逍遙した、美人は山の如く、酒は泉の如く光景さながら樂士とは之れを謂ふのかと思はしむる位である、彼れこれするうち演藝も終りになつて、彌くパリ名物のシャイヨー踊となつ

て、八九の美人各々輕装して奏樂の調につれて一足を天に朝さしめたり、又は兩股を一直線に開いて床の上に座したり、實に見るに忍びざる醜態百出、道德の觀念深き輩には殆ど座に耐ゆる能はざる位である、知泉默然として初めより一言も吐かなかつたか、突然長大息をしながら「秋濤、あれを見ちやア十九世紀も末路じやないか」

### 愛兒桑門に入る

トルコ風呂位贅澤な物はあるまい、又トルコ風呂位奇妙な物はないのである、是はトルコ國の風習に因る所であつて、随分旅人などは、此トルコ風呂に這入つて一驚を喫することが多いのだ、横山孫一郎氏東亞漫遊の途中、コンスタンチノープルに

立寄りトルコ風呂に一浴を試みた、  
 風變りの風呂のことゆへ、心氣爽かに、ヘルシヤ邊から脊負つて来た垢を總て此處  
 に於て洗ひ盡したやうな心持であつたが、終に三助が来て、陰毛へ何か貴重相な藥  
 を塗抹た、扱はトルコ人は此邊を神聖なる物として、彼のシルコンスクリブシヨ  
 と言つて、包皮切解を宗教上の一例とし、男子に試みる位であるから、  
 此の陰毛の如きも其藥を用ゐて、奇麗に油でも落して呉れるんだらうと考へ、爲  
 が儘に爲して居つた處、  
 登計らんや、三助は之を塗り終り凡そ二三分の後、再び來つて之に温湯を打注けた、  
 すると、毛はザラリと落て丸坊主となつて仕舞つた、横山氏一驚、歐羅巴へ來て「カ  
 ワラケになつた、カワラケになつた、」

禪で顔を拭く

是は臺灣での出來事である、臺灣授受の後、民政局を臺北に設け、茲に於て追々施  
 政の方針も定まり、百官其部署に付いて事務に執掌することになつた、恰も六月中  
 旬のことであつたが、日は暮れても炎威は赫々として、玉なす汗は瀧の如く流れ落  
 るばかりである、故に高等官等は打寄つて中庭に涼臺を設け、之に倚りつゝ夜深く  
 なるまで涼を貪つたのであるが、  
 或る晩のこと、此處に居つたは服部甲子造氏である、氏は一時泥酔判事とまで名を  
 取つた酒豪であつたが、臺灣へ來るに付いて堅く禁酒をしたのみならず、人物も一  
 變して温順い方となられて居つたのであるが、氏に潔癖があつて、食事に際すれば

手を何十度となく洗ひ、箸茶碗を拭くこと何十遍、聊にても汚點があれば直ちに之を拭ひ、又物に依つては之を變へると云ふのが氏の習慣性であつた、故に衣服の如きも勤めて清潔な物を着、ハンケチの如きも勤めて新しき物を所持して居る位である、偶々狐鐵を以て名ある檜山鐵三郎氏が此傍らに居つたが、氏は又服部氏とは正反對の性質であつて、一向物に頓着しない、氏が帯で居つたる所の禪は、殆ど此處に數十日、油染て最早眞黒になつて居る、夫を今夜こそ取換へやうとして之を外し掛けて居る、夫とも知らぬ服部氏は傍から、「オイ檜山君、僕は非常な汗だ、手拭を忘れて来たが君一つ持て居るのなら貸して呉れ給へ」、

常に惡洒落を以て目されて居る狐鐵先生、そらキタと外して渡したは右の汚れ禪、服部氏は之を持て、顔を何度となく拭いたのである、檜山氏は座に堪へずして其處

に絶倒したるに、服部氏は氣が付きて、月光に之を見れば、手拭ならざる越中禪殊に垢だらけと来て居るから、氏は怒るまいことか、烈火の如くになつて、檜山氏を擲るやら罵詈するやら、漸く仲裁が這入つて事なく終へたけれども、爾來服部氏は數日間、殆ど朝から晩まで水垢離に日を暮して仕舞つた、

### 臺灣の藝妓買

施政の方針も定つて、それ／＼秩序も付いて来た時分、扱、思出すは内地の藝妓買、臺灣に來ても其位の遊びはしても宜からうと、好物連が寄合つての大評議、賛成々々の聲と共に、今夜一つ臺灣藝者の口切りを、吾々で演じやうと言つて飛出したは、牧朴眞、高梨哲四郎、木下新三郎と長田秋濤の四人で、大塚程街なる某酒樓に登つ

た、酒樓といへど名のみであつて、内地の裏店よりも不潔い場所、僅に食ふ物が珍しいと云ふばかり、藝妓を一つ呼んで來いと命じると、凡そ二三分の後、輿に乗つて現はれて來たは年の頃十七八の一小妓、チンコロンタンやらキユウレンスウめいたる唱歌に、思はず四人は日頃の爵を散じて大浮れに浮れ込んで、酒氣ブンくと官邸指して歸り來ると、先づ門番に叱咤されたが、幸ひに事無くして通つて、各々其部屋に歸らうとして、

民政局長官水野遵氏の室前に掛ると、遵先生紫檀の大椅子に胡坐を組で構へ込み、眼球を光らしながら、「君等は全体何處へ行つて居るのだ、今時分揃ひも揃つて酒氣を帯びながら歸つて來るとは下僚の見せしめにならぬではないか、高等官たる

者の資格に對して威嚴を損する譯である、不届千萬な、以後慎み給へ」と、大喝一聲、四人は平素ならば、口返答もし一論判を始める所であるけれども、何しろ此方に落度があるが故に、一言も出さずして流石の豪傑連も、這々の躰で狐鼠々々と部屋に歸り、斯う云ふ時には水野の好人物も怖いものだ……」

### 公義號の三鞭酒

臺灣授受は六月四日と覺えた、李經芳は公義號に乗り馬建忠、陶大均、伍廷芳、羅豐祿の諸員を引連れて、上海より淡水に來り高千穂艦に護せられて、三貂灣なる總督の所在地に、三日の晩と覺えたが晩靄を破つて碇泊した、待構へたることであるからして、最早當方に於ての準備も充分に届いて居る。

其晩直ちに公義號よりは、陶大均をして來灣の通知を我れに向つて爲す、我れよりは又副官を送つて之に答禮をせしめ、其翌日は朝から臺灣授受に付いての談判を始めたのである、種々なる議論などがあつたが、是は此の滑稽的文章に記すべき物でないから省いて、

愈々臺灣受取書を交換することになつたのである、然るに、我が方にては如何なる手落であつたか、此受取書を記すのに、一枚の紙も用意して居らない、故に李經芳の方に人を遣はして、紙の有無を問ふた所、彼れは既に何十枚となく、大奉書を用意して居つて、吾々に向つて、其半分を割て譲つて呉れたが故に、是れへ臺灣の受取書と云ふものを記した、其記したのは即ち秋濤である、  
當今も受取書が内閣の國庫に残つて居るだらうし、此清帝に渡した受取書等は彼方に

に保存されてあるだらうが、愈々其受取書を交換することになつたのは夜の十時過であつて、近頃大阪鴻池銀行の頭取をして居られる、島村久(特命全權公使)君と、

秋濤との二人が派遣されることになつた、

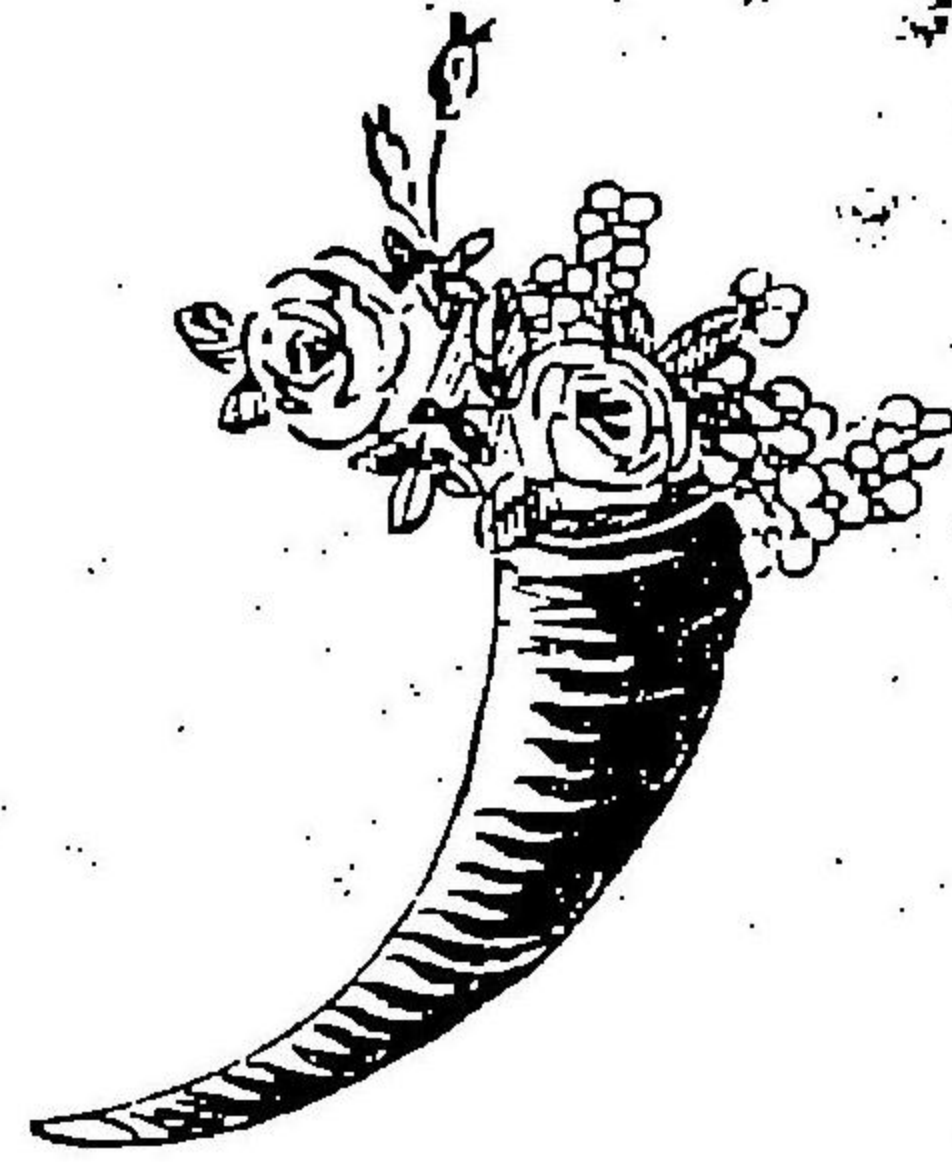
李經芳に面して互ひに無事完結の祝辭を述べ合つて、書類の交換を済して後に李經芳は徐に、我等二人に向つて三鞭酒を飲みつゝ尙語を改めて 日本皇帝陛下の健康

を祝し、又當方に於ても 清國皇帝の健康を祝し、夜の十二時過に軍艦より放つ

段々たる祝砲の響と共に公義號は波濤を蹴立て、上海に向つたのである、

此時島村久氏と秋濤は小艇に乗るが否や、島村氏は秋濤を顧みて、「オイ長田君敵はないな、秋濤何が敵はないのです」、久「ダツテ彼の三鞭酒の味は何うだ」と、言はれて氣が付いて見ると、我が横濱丸で李經芳に差出した三鞭酒は價大凡一二圓の三

ふりふ



を  
は  
り

樽酒、彼方が吾々に注いだ三樽酒は凡そ十二三圓の物、亡國に近い國とは謂ひながら、矢張大きな所は大きいもので、クチ／＼したことは、流石は彼れはしないものだ、二人は相顧みて苦笑した、



附錄 奇話一東

長田秋濤講演

土耳其風呂

土耳其風呂と云ふものは、是は實に世界に此位發達なものはない、私は土耳其へ行つたことはないけれども、巴理に居つた時分に土耳其の風呂と云ふものが巴理に出來た、其風呂は宏大にして且つ壯麗なるものである、

全脚西洋人は湯を浴ふことが非常に嫌ひて、一週間に一遍這入れれば、それで頂上、  
 平常は朝身体を拭くを以て足れりとして居る、何方かと云ふと甚だ汚い方だ、さすが  
 日本人の方は毎日朝夕湯に這入る、江戸ッ子は煤章魚見たいになつて歸つて来る、  
 それを功にして居るけれども、西洋人はナカ／＼さう云ふことはしない、所が土耳  
 其人だけは入湯が好きと見える、且つ夫に付て贅澤である、入湯のみならず雪隠は  
 また土耳其の雪隠は立派なものです、雪隠の御話は別として今日は風呂に付いて  
 御話をしやうと思ふ、是は私の實驗談だけを御話する、  
 さて其風呂屋と云ふのは何う云ふのかと言ふと、先づ伽藍だ、日本の大寺院又は觀  
 音堂の中へ這入つたやうな心持がする、土耳其の風呂と云ふのは湯の中に這入る譯  
 ではない、蒸風呂です、それで先づ風呂屋の門口を這入ると其處で札を賣つて居る

其札を買ふのが先づ日本ならば錢湯が二錢、今では幾らになつて居るか知らぬけれ  
 ども、土耳其風呂では此一風呂の直段が先づ十フラン即ち四圓です、それですから  
 度々這入れないのも無理ではない、それで札を十フランで買つて、さうして變な小  
 さい門がある、其門を這入ると其處に着物を脱ぐやうになつて居る、着物を脱ぐと  
 其處に一人のボーイが居て、それが凡そ百疊敷位の、天井の高さと言つたら見上げ  
 る位の恐ろしい部屋へ連れて行く、此部屋へ這入るとマルで呼吸が詰つて仕舞ふ、  
 蒸風呂ですから、空氣が殆んど百度以上の熱さだらうと思ふ、其處へ幾つも椅子が  
 列べてある、それに兜掛つてチツとして居る中に、其空氣が熱いから漸次にダラ々  
 ダラ／＼汗が出て来る、出て来ると自然身体が温大ると云ふ氣味になるに違ひない  
 其處へ黒奴がやつて来る、さうしてモウ宜しうございませう、此方へ御出で下さい

と云ふので、彼れに導かれて側にある狎みたやうな上へ臥る、人間を殺す譯でも何でもないけれども、狙の上へ大の字なりに臥かす、さうして置いて黒奴が頭から足の先きまでグン／＼グン／＼擦るので、

身体が温大けて居るものだから、有とわらゆる身体中の垢を皆擦出して仕舞ふ、それが凡そ十分から十五分間位の間、出来るだけ擦られる、出来るだけ玩弄具にされる、モツ是れで宜いと云ふ時分に次の部屋へ連れて行く、此處では何をするかと思ふと、先づ第一に生温い湯だ、生温い湯でポンプを以て掛られる、丁度日本ではないけれども西洋の市街ではポンプを以て始終水を撒いて居る、日本でも水道が完全したならば恐らく斯云う風になるに違ひないが、歐羅巴では大概水を撒くにはポンプで撒く、其ポンプ同然のもので、チャアチャアと遣付ける、暫時の間疼痛を

覺ゆるけれども構はない、ドシ／＼遣る、それがぬる温湯から少し熱い湯、それから極く熱い湯と云ふ風に段々に階級を経てポンプに當らせる、最後にズーシと稱へて是は蒸露です、天井から水を掛けるので、栓を外すと上から温雨が降つて来る、此湯が真に好い加減の温度で何うも大變心持が宜い、それが濟むと今度は大變です「此方へ御出てなさい」と云ふから慎んで命を奉じて其處を出ると、凡そ十間位の池がある、其池に深い池と浅い池とある貴方は泳ぎが出来るなら深い方へ御出でなさい、貴方が徳利であれば此方へ御出てなさい！

と云ふので、それは湯が必ず其池に一杯になつて居るのだらうと思つて、私杯は幸ひにして徳利でない、鐵砲丸でもないから一つ泳いで海國男子の本性を見せてやらう、河童子然たる真相を現して遣らう——何にもさう云ふ處で威張るにも及ばぬけ

れども、池の中へザンブリ飛込むと、豈計らんや湯ではない、素敵な冷い水である  
今まで熱い蒸風呂の中で垢をとられ又好い加減温い湯のポンプで身体を洗はれて、  
さうして温い雨に打たれた處へ突然冷い水の池の中のドンブリ這入つたのだから、  
其時の心持は幾ど氣絶する位であつた、が、モウ這入たが最期出る譯に往かぬ、躊躇  
躊躇するならば意氣地のない奴と言はれないかと思ふから、それから十間ばかり泳  
いで向ふへ上つて初めて息を吐いた、息を吐くと其處はナカ／＼行届いたもので、  
鹽二疊敷位の西洋手拭を悉皆温くしてさうして池から出るが否や突然それで身体中  
を悉皆巻いて仕舞ふ、ミイラか何か拵へるやうな鹽梅に悉皆身体中を大手拭で巻い  
て仕舞つて、身動きの出来ないやうにする、さうして黒奴の肩に摺つて行くと今度  
は御酒を飲ませる部屋がある、其酒を飲ませる所にはチャント長い寢臺が出来て居

つて、土耳其の布で拵へてある立派な安樂椅子に烟草を喫む器械から、酒を飲む道  
具から、何にも彼も備はつて居る、其處へ一時寝かすのです、さうして今度は暫の  
間寝かすと、「酒を御飲みなさい、興奮をしないで往けませぬ、熱い所から冷い所  
へ来て身体が震へ上つて居るから、何か身体の中を温くする物を飲なくつては往な  
い」と云ふので、或はポルトウアインとかブランデーとか各自好きな物を飲む、さ  
うして先づ三十分から四十分の間新聞を見る人は新聞を見、小説を読む人は小説を  
讀むと云ふやうなことをして、さうして始めて本統の着物を着換へて湯場を出ると  
云ふ、即ち是が土耳其風呂、實に贅澤なもので、連も日本人の考には及ばない所  
ある、此土耳其風呂と云ふものは土耳其のみならず露西亞邊にも澤山ある、デ日本  
では熱海などで眞似をして居るけれども、全然穴居の時代の湯に這入るやうな具合

て、崖の中へ潜り込むと云ふやうなものだ、けれども彼方のは大伽藍の中に這入つて、さうして心持好く蒸されると云ふので、餘程肺癆が日本とは變つて居る即ち是が土耳其風呂の御話、

### 印度の蛇遣ひ

印度の蛇遣ひと云ふのは是は私が二三度實見をした話で印度の内地には私は餘り深くは行つたことはないけれども、錫蘭其他彼の邊を暫く旅行したことがある、蛇遣ひと云ふのは印度の名物である、それで錫蘭島のコロンボと云ふ所へ船が着いた、先づ其處へ暫く碇泊をして居るから、見物でもしやうと云ふ考で、色々上陸の支度をして居る所へ、汚ならしい印度人が一人這入つて來た、丁度機の半分位な箱を手

に提げて居る、是はシンガリヤンと云ふ彼の邊の土人であつて、顔の色は薄黒いけれども、ナカ／＼立派な骨格をして愛嬌がある、頭には布を巻いて居る、時々諸君等も横濱遊りて御覽になるだらうと思ふが、裾の所へグル／＼と更紗見たやうな布で腰巻をして裸足だ、それが肩の所からチャント箱を掛けて、手にハンドオルガン或ひは器械のゴロン／＼となる樂器を持つて船客等の所へ廻つて來る、全軀僕は性質として甚だ蛇嫌ひ、蛇と來たら一も二もなく降参する男、蛇を見たらば流石の秋濤一言もない、何に向けられるより閉口だ、其蛇嫌ひの男が上陸しやうと思つて頻りに部屋の中で顔を洗つて着物を着換へて居る、と樂器の音がするから、何かやつて來たか知ら、或は上陸を祝ふが爲めに音樂でも奏して呉れるのかと思つて居ると、怪からぬ、西洋の禮式に倅つて戸を叩きもしないでズツと這入つて來た人間がある

何だと思つて後を見ると箱を持つて居る、加ふるに甚だ驚いたのは、其箱の上に蛇が五六疋頭をヌツト上げて居る、

其蛇が動物園で能く観る、——日本の動物園などには無いけれども——鈴蛇「ラツトルヌチーク」と云つて先づ毒蛇中の毒蛇、之に噛まれたら五分間に死ぬか、或は二分間に死ぬと云ふやうな實に猛悪なる動物、其がニユツと五六疋首を出して居る、驚くまいことか實に驚いた進退谷まる、逃げたくても行く所がない、小さな船室の戸の所へ立つて彼奴がガラン／＼鳴らして居るから、「彼方へ行け／＼」と言つても命を奉じない、好い加減に嘲弄して居る、のみならず蛇を段々に箱の上へ出す殆ど僕は活きた心持はしてない、一疋でも恐れるのに、五六疋の蛇と来たから尙ほ大變だ、それから頻りに杖を振つてシツ／＼とやつて見たり、或はハンケチを以て

彼方へ行けと手真似をするけれども一向先生平氣だ、其處で此方も斯うなつたら仕方がない、度胸を据る所だと思つて、ドツカと其處へ座つて遣るなら遣て見る、何をするか後學の爲に一つ見て遣と云ふ勇氣を起した所が彼れ得意になつて今度は、ノロ／＼ズル／＼箱の中から幾つとなく蛇を這出させる、先生調子に乗てガラン／＼樂器を鳴らす、鳴らすと愈々箱の上へ一ダースに餘るラツトルヌチークが現れた、鈴蛇の尾に鈴があつてガラン／＼音がする、毒蛇と雖も、幸ひに尾には鈴がある爲めに、彼れの來ることを豫知することが出来る、鈴蛇が來るとソラと云ふので人間が逃げる事が出来ることと云ふ位のもので、造化の配合甚だ奇にして妙幸ひと鈴を持たしてある、其毒蛇が先づ一ダース箱の蓋の上へズラリ揃つた、扱て是から彼等が藝をすると云ふことである、愈々用意が整ふと其蛇

遣ひが咳一咳もしないけれども眞面目になつてブーとやると蛇がスツと頭を伸出した、さうして一度に揃つて首を擡げてガラン／＼と言ふ音に連れて向ふへ顔を向けたり此方へやつたり、ビヨン／＼飛ぶ奴がある、跳る奴がある、實に氣味の悪いことい言つたら、モウ活た心持は無かつた、即ち之は印度の蛇遣ひ、此蛇遣ひは又一方に魔法も遣ふ、魔法と云つては可笑しひけれども、全脚印度には魔法と云ふものがあつて、色々な藝をするが、それが寧ろ手品遣ひの方であつて其中のあるものは此頃日本などでも學術界の一問題になつて居るが、小さな桃の實なり、櫻の實なりを持つて來て、板の上へ載せさうしてそれへ土を被せる、二分間位經つとスツと木が伸びて仕舞ふ、さうして葉が出る、花が咲く、實が結ると云ふやうな事をする、是は太陽雜誌で見たかと思ひましたが蟻酸と云ふものゝ力を借てやるのだと云ふ、け

れども、甚だ分らない話である、僕等には原因は分らない、手品の術と云ふものを解する事が出来ない、實に奇中の奇である、其他又面白いことをやる、木綿糸の屑です、屑を大きな鞠にして、さうして總て玉にし、其鞠を觀客に渡して悉皆切らせる、切つて粉々にさしてそれを又まるめて居る、彼は裸躰であるから何處にも他に何を持つて居ることも出来ない、日本人の手品使ひだとカフスの中から種々な物を出したりするけれども、彼は何にもないのに裸躰で切つた糸を揉んで居る、其中に奇なるかな一の紐を取らせる、サアそれから今迄切つた屑糸がズル／＼ズル／＼皆續いて仕舞ふ、それ揉も實に私の見た手品の中では奇中の奇と言はなければならぬ、之が先づ印度の魔法と蛇遣ひの御話、

### 博物學者の失策

是は世の中の人が餘程省みべきことであつて、所は柴棍——柴棍と云ふと御承知のない御方があるか知らぬが、安南の港で、今日は佛蘭西領になつて居る、熱帯地方のことであるから蛇が非常に澤山居る、蛇の話が度々出ますやうですが、蛇の夥しいこと非常なもの、私共が歐羅巴に行く時分には必ず其港に碇泊して、一二日間は必ず上陸して其邊を遊覽することになつて居る、此處に一人の博物學者があつて、其博物學者は人間と云ふ者は兎角蛇が嫌ひだ、乃公は一つ蛇の世界、此處に生れた所の蛇を悉皆集めて、佛國西の博物館へ輸送して、——蛇學者として大勳位にもならうと云ふ考を出した、それから毎日々々人を使ひ、又自分も奔走して蛇を集めた

ことが三萬幾らと云ふ數になつた、怪からぬ奴である、僕杯が居たら直ちに豫戒令を喰はせる奴だけれども——彼れは得意に、蛇を集めて自分の廣くもない家へ飼つて置いた、時機が來たならば其蛇を佛蘭西へ輸出しやうと云ふ考であつた、所が或日のこと、先生蛇の箱へ鍵をすることを忘れて仕舞つて何處かへ出た、其の留守に三萬幾千と云ふ蛇が皆外へ出て仕舞つた、さうして其一村と云ふものは殆ど蛇ばかりになつて仕舞つた、何うして大勳位所の話ではない、警部には劍突を喰ひ、村からは苦情を持込れ、途法もない非常な耻辱を受けたと云ふことがある、餘り下らない名譽を求めやうとすると、輒ち斯の如きことになる、是は一つの修身談、

### 有難迷惑



大層困つたお話が續く様ですが、是は私が實に非常に困つた話です、露西亞と云ふ處は氣候が御承知の通り寒い、故に果物杯と云ふものが餘程價が高い、或日のこと露西亞と獨逸の國境の處であつたが、冬のこと、或市街を私が遊歩すると、芽生の桃の木があつた、七八寸位の高さになつてそれに小さな實が結つて居る、大變面白から、之を買ひたいと思つて其店に這入つて、此木を一つ賣つて呉れないか、直段は何の位のものだと聞いて見た所が、丁度日本の金で四十圓ばかり、流石の僕も呆れ返つた、貧書生の身で逆も桃の芽生に四十圓の金は出せないのではうくの躰で歸つたことがある、それは露西亞に於ての話であつたが、私が巴里で病氣になつた時分、何うも熱があるので果物が欲しい、所が幸ひ私の同窓の學友が來た、名は言ひませんが、其友人が「貴様が果物を食ひたいと云ふ話だが、乃公が行つて買

つて來て遣らうぢやないか」「それは頼む寄宿舎に在て不味いソップに雪駄の皮見たやうな牛肉を食つて居るのだから、君が露の垂れるやうな美味い果物を買つて來て呉れるならば實に君は再生の恩人だ」何にもソンの譯ではないけれども何分宜敷と頼むだ、「君は錢を持つて居るか」「錢は無い」「宜しいそれなら買つて送つて寄越してやらう」と云ふので先生出掛けて行つた、此方は頼りに今に美味い果物が來るだらうと思つて待つて居つた、さうすると一時間ばかり經つと、立派な青々とした籠へ林檎だとか蕉實だとか、梨だとか、柿だとか氣候違ひの物を何うも澤山送つて遣した、是は非常に珍しい物ばかり這入つて居る、時は丁度二月の寒天に、柿があるとか蕉實があるとか、林檎の美味いがあるとか、是は餘程珍しい、早速それを受取つて置いて、さうして勘定書を持つて來たかと云うと、勘定書は持つて

来ませぬ、何れ後から持つて来ます、と云ふ、寄宿舎の生徒でもナカ〜信用があつて、其時分は果物屋から信用されて居つたと見える、「早く持つて来て呉れ、實は私も多少是はッと思つてギョツとして居る、是だけの果物を遣すのには普通の直段では来るものぢやない、必ず高いには極つて居る早く〜勘定書を見なけりやア安心が出来ないから、何しろ早く勘定書を持つてきてくれると云ふので、勘定書を取寄せた、取寄せて持つて来たのを見た所が驚くまいことか三百フラン日本の百二十圓、何うも驚くまいとか實にいくら何でも一ヶ月の學資どころの騒ぎではありはしない、果物一籠が百二十圓、併しモウ返す譯には往かない、此處が日本男子の氣性を見せる所と思つて、宜しいと引受けたけれども血の涙が出た、何しろ果物の御蔭で二ヶ月間位は彌々以て美味いソップも吸はないで我慢をしなければならぬ様に

なつた、友人の餘り出来過ぎた友情と云ふものは難有迷惑な話と云ふ譯け、

ステーションのチン〜モガ〜

日本人が西洋へ行くと風俗人情習慣の異なる爲に盛に失策を演ずる、失策位ならばまだしもなれど、國體に關する様などを、兎角日本人は島國根性が亡せないで空威張をして見せるけれども西洋へ行くと、それは〜情けない程あけ足をとられたり、滑稽新聞や繪入ポンチの種となるものが澤山だ、といふのは日本人が平常宇宙を遠觀し歐米を一呑にする根性がないからだ、一つ奮發を冀ひたい、  
夫で第一に申上るのは停車場のチン〜モガ〜と云ふ題である、けれどもチン、モガ〜といふとは諸君も御承知だらうが、即ち片足を揚げ片足でビヨ〜飛

ふことである、此話の主人公は今日樞要の地位に居られるナカ〜エライ仁で、酔ふては美人の膝を枕とし、醒ては天下の權を握らるゝと云ふ位な大政治家でもあるし、時に陣頭に立て叱咤すれば三軍皆振ふといふ様な大軍人！其人が佛蘭西のマルセルから巴里へ旅行される途中の出来事である、歐羅巴の鐵道といふ者は中々完全して居るけれども佛蘭西のが一番不完全である、夫に反して獨逸の方は餘程整備して居る、日本の人は兎角下の締りが悪いと見えて——食物の工合かも知ぬが——少し長路の旅となると是非WCがなければ苦しむ様な譯である、然るに佛蘭西にはこのWCがないのです、大概の汽車では時間を見計て停車中に用をたさなければならぬ、急行列車に乗ると先づ三時間位は停車せずに飛ぶ故に、萬一急用の場合には實に非常の困難を感じるから豫め注意をせねばならぬ、

然るに此東洋の大豪傑閣下は相替らずビールか葡萄酒を飲み過ぎられたか、用をたさなければならぬ場合になつたが、汽車は疾風迅雷の如くビュー〜と走つて、とても五分や六分で停る様子がない、流石の英雄も此場合に際しては兜を脱がなければならぬが、今更兜も脱げぬ、まゝよ長靴でも脱げと覺悟して、長靴を脱いで、其中に用をたし、さうして汽車の窓から之を溢した、先づこれ一時の防禦は出来たといふものゝ、間もなく一笛一聲汽車は停車場へ着した、降りねばならぬ、然るに長靴の中は濕つて居るから、サア幾ら履いて見やうとしても這入らない、巴里、といふ聲はする、氣はもめる、長靴は片足役に立ぬ餘儀なく其長靴を片手にブラットホームをチン〜モガ〜、

トンネル中の蜜柑

夫れから今度はトンネル中の蜜柑と云ふ題、是はズツと奇麗な話、今は故人となつたが、名を謂へば即ち成島柳北翁の逸話である、佛蘭西から伊太利へ行くにはアルプス山を越えなければならぬ、このアルプス山下にはモダースと云ふ有名な世界第一の長隧道があつて、凡そ三十分間餘は暗黒世界の人となるのである、夫れのみならず此邊は山又山であるから隧道を抜けては這入り、這入つては抜けるといふやうな風になつて行くのだから、朝の九時頃から翌日の九時頃迄凡二十四時間は始終隧道を通りどうした、日本の人は箱根や戸塚の隧道で肝をつぶして、彼方の窓を締めては手をはさみ、此方の窓を閉めんとしてはガラスを破すといふ様な騒ぎをする位

だから、若しモダースの隧道にても引ずり込だら恐らく目を廻すに定つて居る、氣付薬を充分用意する必要が起る譯け、

ところで柳北翁に或人が忠告をした、彼のモダースの隧道は天下最長のもので、先づ三十分から四十分間は、この世からなる地獄を見ると同様である、殊に空氣が腐敗して居るから酸素を吸ふ必要がある、もし吸はなければ窒息して仕舞ふかも知れぬ、宜しく蜜柑を一箱位貯へて行かなければ、それこそ大變、またと再び故郷に残したまへる妻君御子供衆は勿論、日頃御懇意の新柳二橋の尤物連にも逢ひ給ふと出来まじ、是非蜜柑の一二箱は準備が必要々々と、妙におどかして仕舞つた、柳北翁は驚きましたね、何も僕はチメ〜とモダースの隧道で落命する積りで歐羅巴へ來た筈でない、命は貴い、可愛い人をどうしやう、蜜柑の二箱や三箱はあるか、幾箱で

も關はないと決心して、其用意に怠りなく愈々出發した、  
 サア伊太利亞境へ來るとソロ／＼隧道が始つた、すると同伴者の某氏は人惡で、隧  
 道へ入らうとすると、ソラモグーヌだらうと云ふと柳北翁は一生涯懸命にむき始める、  
 食へ出す時分には隧道を出て仕舞ふ、また隧道へかゝる、ソラ今度は眞物といふと、  
 翁はあはて、蜜柑を口に入れる、如斯してとう／＼幾十となく蜜柑を食べて愈々  
 眞のモグーヌの隧道に這入つた時分には最早蜜柑が盡きて柳北翁非常に落膽したと  
 いふお話し、

### 汽車の飛乗

それから汽車の飛乗と云ふお話し、是れも今現に或樞要なる位置に在る武官の事であ

る、私カ丁度伯林へ行つて居つた時分に伯林の傍の○とか云ふ所に火薬製造所があ  
 る、其火薬製造所へ案内をするから君も來給へ、連れて行つてやると云ふから、悦  
 んで同伴を約して時間を極めて停車場へ行つた、所が何時まで經つても來ない、幸  
 ひ私の仲間も四五人居るので、皆其人達も製造所へ行く仲間ですから汽車の時間  
 が來りやア仕方がない、先きへ行つて待たうてはないか、向ふの火薬製造所の方で  
 も人を出して必ず此の汽車で來るだらうと思つて待つて居るに違ひない、宜しく我  
 々は先きへ行つて仕舞ふが宜い、後と僅か十分か十五分の後には第二の發車がある  
 から、それへ乗つて來るだらうと云ふので、汽車へ乗つて仕舞つたのである、乗つ  
 て暫くする中に一聲の汽笛と共に汽車が動き出した、サア私共如何にも心配で、  
 早く來れば宜いと窓から首を出して見て居ると、瀛車がプラットホームを離れんと

する所へ向ふから一人の日本人が韋駄天走りに駈けて来る、見ると私を連れて行く人です、其中に影が見えなくなつた、是は逆も乗れなかつたか、何うしたらう、モウ少し早く来て呉れれば宜かつたものと、斯う思つて、頻りに汽車の上で考へた、愈々向ふの停車場へ着いた所が先生ボツクリ出て來られたのは宜いが、警察官が二人附いて居る、悄然として長田君、僕は何うも大變なことをした、大變とは何かと云ふとモウ汽車へ逆も乗れないからアノ汽車の繋ぎの所へ二つ大きな物が出て居るだらう其處へ飛乗つて、さうして夫れに掴つて此處まで來た、停車場へ這入り掛けに認められて警察官に渡されたが、何處へ行くのだが知れないから何うかして助かる道はないかと云ふので、幸ひ向ふの火藥製造所の出迎人が居る爲めに、警察官に頼んで、犯則ではあるけれども、警察署まで行くに及ばないから、四十マルクの罰

金を出せと云ふことで濟だと云ふ事です

眉毛を剃落さる

歐米の風俗習慣を熟知しない者は、彼地へ行けば必ず大失策をすのは當然である、内地雜居になつた今日ですらアイスクリームヘソイスをかけて平氣な顔をして食へる大文豪もあれば、ソツアの皿飲をして一席の笑種となつた英雄もある、今日ですら其通り況や三四十年前以前丁髷を結んで居る社會がヨーロッパの地を踏めば無論驚天動地の奇劇を演ずるのは止を得ない次第と謂ふべしだ、今を去る丁度二十四五年前の頃、始めて日本の軍艦が佛蘭西のマルセイユ港へ着いた、其軍艦には夥多の水夫が乗組て居つたが、或日上陸を許されて見物をするのに

なつた、其水夫等の中に上陸したらば早速斬髮屋へ飛込て一つ歐羅巴風の頭を製らへようと思つて、上陸するや否や一斬髮店へ駈付けた、唯見る幾十の玻璃は四方に輝いて、身は月宮殿裡にあるか、將た廣寒宮中にあるかの思ひがする、日本を出發して凡そ五六十日間櫛を通した事もない頭だから、所謂蓬が生へた様だとは此頭らしかつたに違ひない、西洋人も亦驚いたに違ひない、日本人の頭といふものは怪しからぬ程、汚穢を極めたものだと思つたらう、仕方がない商賣だから鼻をつまんでジャキキやり初めて見違へる様な奇麗な紳士香水夫が出来上つた、夫れから顔を剃る段になると、日本では襟あしから顔の邊は勿論眉毛の形まで製へる様な事をする、また一層進んで耳や鼻の穴まで剃刀を入れるが西洋人は腮邊をシャリキやるぎりである、此に至つて水夫は甚だ不満である、いくら

水夫だとして剃るべき處を剃らぬとは實以て不埒千萬だ、宜しく命令すべしと思つて切りに手を以て眉毛の邊を剃る眞似をして見せた、斬髮屋の小僧は更に其意が判らぬ、日本人といふものは奇妙な眞似をするものだと切りに考へて見ても理解せぬ、主人の處へ駈けて行つて相談をする、主人は之れを聞いて暫く考へて居たが、小僧の耳許へ口を寄せて囁いた、小僧は之を聞くと嫣然笑つて再び此水夫の傍へ戻つて来るが早いか、剃刀を取つて水夫の眉毛を剃り落した、水夫は驚きましたね、何も眉毛を剃れと命じたのではない、眉毛の邊を日本流に剃つて呉れると命じたのである、失望落膽するのも無理はない、遙々馬耳塞まで俳優顔を作りに来た譯でない、眉毛のない顔をして、をめぐり歸船したならば屹度詰責されるは勿論だ、切りにウキ怒つて見たが言語不通で、其上眉毛のない日本人が奇妙な風をして狂ひ居る

2/9/35

附  
録  
を  
は  
り

様子は、却つて大にボンチ！人の黒山をして益恥の上塗をしたさうだ。

明治三十五年五月十日印刷  
定価廿五銭 (郵税附)

發行者 東京市日本橋區樽正町壹番地 堀野典七

印刷者 東京市京橋區西船場町廿六七番地 石川金太郎

印刷所 東京市京橋區西船場町廿六七番地 株式會社 秀英會

發行所 東京市日本橋區樽正町壹番地 文祿堂書廬

不許複製

表紙畫者 大村令邦  
同石版工 香川秀吉



STRANGERS IN STRANGE LANDS  
 (YŌKŌ-KIDAN AKAGETTO.)  
 TRANSLATED BY Dr. HUMOUR.

大 賣 捌

- |      |     |     |     |
|------|-----|-----|-----|
| 東京堂  | 岡崎屋 | 中四屋 | 林平  |
| 三松堂  | 嵩山房 |     |     |
| 大坂   | 盛文館 | 吉岡  | 積徳堂 |
| 名古屋  | 川瀬  | 三輪  | 浅見  |
|      |     |     | 小澤  |
| 東京横濱 | 大坂  | 名古屋 | 丸善  |

訂正再版

英文 洋行 奇談 赤毛布

定價三十錢 (郵税四錢)

(邦文) 洋行 奇談 赤毛布

定價二十錢 (郵税四錢)

世評三曰

◎英文赤毛布

こは嘗て好評を博したる洋行奇談赤毛布の英譯なり譯者はいづれ邦人なるべけれど毫も晦澁の迹なく洗練を極めたり表装印刷共に瀟灑の文祿堂が手に成りしものだけ無類の美本にて校正も亦嚴密なるが如し本書の如きは蓋し英譯して最も趣味あるものなるべく内外人共に愛讀する所なるべし

又

行文洒脱よくユーモアの趣味を發揮したり、原文を對照せば英語研究の好資料なるべしと云へり



小説 小説 小説

曲亭馬琴翁原作 京の御兵衛君演 日本五大噺 一

京の御兵衛君著 滑稽五大噺 二

秋の屋主人著 川柳評釋 三

安藤笹舟君著 福引一千題 四

呦鹿庵主人著 嗚呼古英雄 五

同 續 嗚呼古英雄 六

山形二星君著 嗚呼古遊君 七

巖谷小波君序 福山琴月君著 短歌お伽噺 八

東京市日本橋區樽正町壹番地

文祿堂 堀野書店 發行

賣捌所 全國各地書林諸氏

$$\frac{OD^2}{OA^2} = \frac{OD^2}{OA^2} - \frac{OD^2}{OA^2}$$

$$r^2 = d^2 - \frac{d^2}{4}$$

$$\frac{OD^2}{OA^2} = \frac{d^2}{4}$$

$$OD = \frac{d}{2}$$

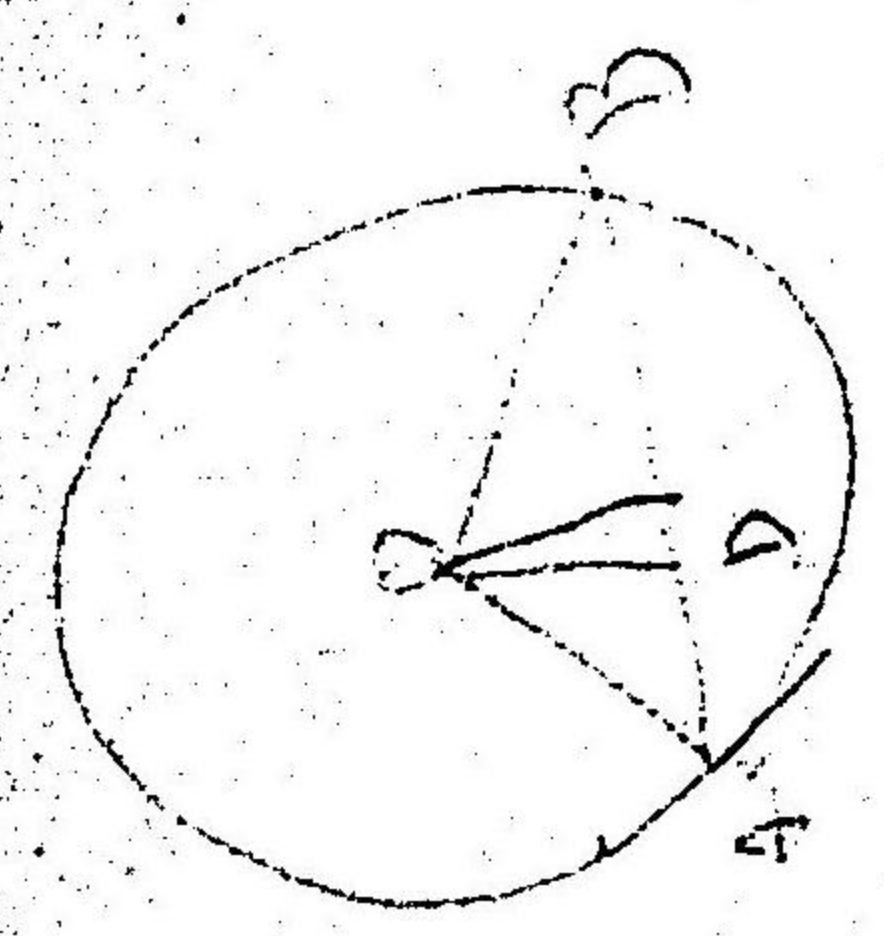
$$r = \frac{d}{2}$$

$$OA = r$$

$$AB = r$$

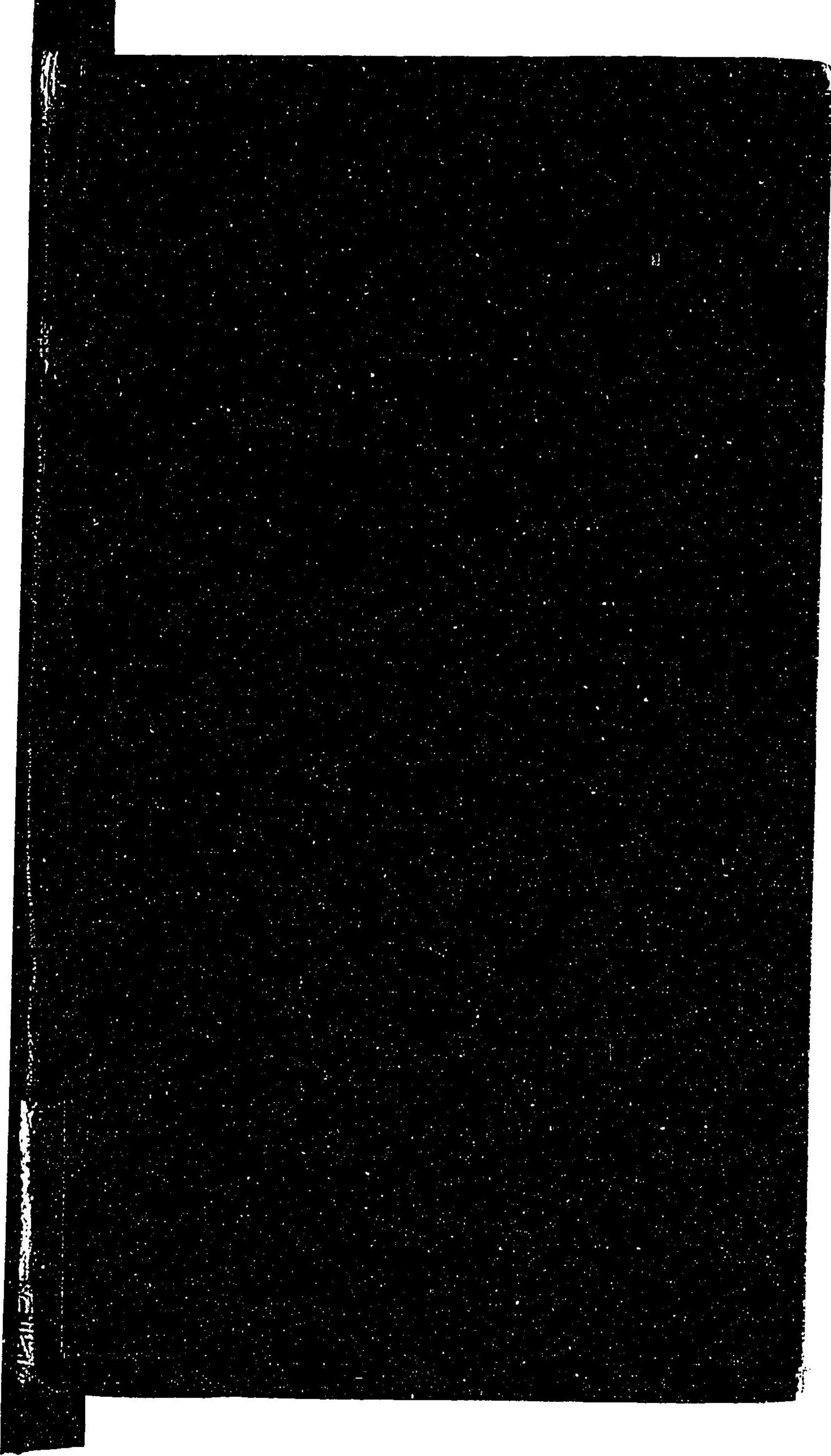
$$OD = r$$

$$AD = r$$



4

16  
4





021986-000-4

96-4

新赤毛布

長田 秋涛/著

M35

ADA-0244



